

浅川扇状地遺跡群

吉田町東遺跡 (3)

—地方道路交付金・地域活力基盤創造交付金（街路）事業北長野通り地点—

浅川扇状地遺跡群

駒沢新町遺跡 (3)

—中央地所駒沢団地地点—

2010年3月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

吉田町東遺跡(3)

地方道路交付金(街路)事業

地域活力基盤創造交付金(街路)事業

北長野通り地点

2010年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡や遺物は、当時の人々の暮らしぶりを現在の私達に伝えてくれます。

本書で報告しております吉田町東遺跡・駒沢新町遺跡は、長野市北部の広大な浅川扇状地遺跡群に含まれており、これまでに縄文時代後期以降平安時代にいたるまで、ほぼ連続した人々の生活の痕跡が確認されています。




ここに長野市の埋蔵文化財第126集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。調査では人々が営んだ痕跡である貴重な遺構・遺物が多数確認されています。その成果は連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、長野市吉田における「平成20年度地方道路交付金（街路）事業・平成21年度地域活力基盤創造交付金（街路）事業 [北長野通り]」に伴う発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野県長野建設事務所長と長野市長鷺澤正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市吉田三丁目933-2ほかに所在する。
- 4 発掘調査は、平成20年10月28日から平成21年1月14日にかけて行い、調査面積は448㎡である。
- 5 遺構の測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 6 遺構図は、調査区全体図を1：500、各調査区を1：200、各遺構図を1：80、カマド微細図を1：40の縮尺で掲載した。
なお、遺構図中のスクリーントーンは  が焼土面を表している。
- 7 遺物図は、土器が1：4、土器片および拓影図が1：3、石器・石製品が2：3の縮尺で掲載した。なお、須恵器は断面を黒塗りで表している。また、 は黒色土器の黒色処理部を、 は赤色塗彩された土器の赤彩部をそれぞれ表している。
- 8 本文および掲載図中には、遺構の略号を用いた。以下の通りである。
SB：竪穴住居址、SD：溝跡、SK：土坑、SJ：土坑墓
- 9 発掘調査の経過において、遺構番号に欠番が生じたが、整理作業の便宜上、本報告ではそのまま欠番としている。具体的には、A区SB2である。
- 10 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略記号「AYMH3」を用いて注記を行い、遺構図版類と共に長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序・例 言・目 次

第 I 章 調査の経過	1
第 1 節 調査に至る経過	
第 2 節 調査体制	
第 3 節 調査日誌 (抄)	
第 II 章 調査地周辺の環境	5
第 1 節 地理的環境	
第 2 節 考古学的環境	
第 III 章 調査の成果.....	11
第 1 節 調査の概要	
第 2 節 遺構と遺物	
1. 弥生時代の遺構と遺物.....	18
2. 古墳時代の遺構と遺物.....	21
3. 奈良・平安時代以降の遺構と遺物.....	27
4. A 区 2 次遺構面	31
5. 遺構に伴わない遺物.....	32
第 IV 章 結 語.....	40
写真図版.....	43

報告書抄録・シリーズ・奥付

挿図目次

- | | | | |
|-----|------------------------|-----|------------------|
| 図1 | 調査地位置図（1：100,000） | 図19 | A区6号住居址実測図 |
| 図2 | 調査地周辺遺跡地図（1：20,000） | 図20 | A区6号住居址出土土器実測図 |
| 図3 | 吉田地区発掘調査地点位置図（1：5,000） | 図21 | B区1号住居址実測図 |
| 図4 | 調査区全体平面図 | 図22 | B区1号住居址出土土器実測図 |
| 図5 | A区遺構平面図 | 図23 | B区2号住居址実測図 |
| 図6 | B区遺構平面図 | 図24 | B区4号住居址実測図 |
| 図7 | C・D区遺構平面図 | 図25 | B区2号住居址出土土器実測図 |
| 図8 | B区3号住居址実測図 | 図26 | A区1号住居址実測図 |
| 図9 | B区3号住居址出土土器実測図・拓影 | 図27 | A区1号住居址土器出土状況実測図 |
| 図10 | B区5号住居址実測図 | 図28 | A区1号住居址出土土器実測図 |
| 図11 | B区5号住居址出土土器実測図 | 図29 | B区6号住居址実測図 |
| 図12 | A区1号溝址出土土器実測図・拓影 | 図30 | B区6号住居址出土土器実測図 |
| 図13 | A区3号住居址実測図 | 図31 | D区1号土坑墓実測図 |
| 図14 | A区4号住居址実測図 | 図32 | 縄文時代の土器・土製品(1) |
| 図15 | A区4号住居址カマド付近実測図 | 図33 | 縄文時代の土器・土製品(2) |
| 図16 | A区4号住居址出土土器実測図 | 図34 | 石器(1) |
| 図17 | A区5号住居址実測図 | 図35 | 石器(2) |
| 図18 | A区5号住居址出土土器実測図 | 図36 | 調査地周辺での遺構の時期的変遷 |

表目次

- | | |
|----|------------|
| 表1 | 調査地周辺遺跡一覧表 |
| 表2 | 検出遺構一覧表 |
| 表3 | 出土土器観察表 |
| 表4 | 石器観察表 |

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

平成18年10月1日に長野県長野建設事務所より、平成19年度以降の公共事業計画が提出され、当該開発行為区域が埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡」に該当しており、遺跡の保護を図るための2者協議が必要と回答する。その後、長野建設事務所と長野市埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財の保護協議を重ね、平成20・21年度の2年次にわたって記録保存を目的とした発掘調査を実施することが計画された。平成20年6月30日付で長野建設事務所長より文化財保護法第94条に基づく開発行為の通知がなされ、7月16日付で長野県教育委員会より発掘調査を必要とする通知がなされた(20教文第9-55)。その後、7月28日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。発掘調査区は既存道路に隣接しており、通行車両や通学児童などの安全確保が必要であること、また現場内において発生土の保管場所確保が困難であることなどの理由により、事業範囲を細分して調査にあたった。平成20年10月28日から12月16日までは既存道路西側のA・B区(370㎡)、平成21年1月6日から1月14日までは既存道路東側のC・D区(78㎡)の調査を行った。平成20年度の調査は計40日間、448㎡にわたって実施された。

平成21年度は昨年度の調査によって、遺跡範囲から外れることが想定された部分の工事立会い調査を実施するとともに、整理作業を実施し、本報告書の刊行に至っている。



図1 調査地位置図(1:100,000)

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 陸秀 (～H 21.12)	堀内 征治 (H 21.12～)
総括管理者	文化財課長	雨宮 一雄 (～H 20)	金井 隆子 (H 21～)
総括責任者	埋蔵文化財センター所長	青木 和明	
	(庶務担当) 係長	宮沢 和雄 (～H 20)	北村 嘉孝 (H 21～)
	職員	吉村 久江 (～H 20)	大竹 千春 (H 21～)
	(調査担当) 係長	千野 浩 (H 21～)	
	主査	小林 和子	
	主事	宿野 隆史 (調査員) (～H 20)	
	主事	塚原 秀之	
	専門員	遠藤恵実子・山野井智子・柴田 洋孝 (調査員・編集) (～H 20)	
		向山 純子 (～H 20)・小林 由実・小山 夏奈・西澤 尚紘	
		山本 賢治 (H 21～)	
発掘作業員	上原律江・金子多恵子・後藤一雄・塩入洋子・田村秀之・寺島直利・宮澤周子・宮下美代子 山口勝己・和田五男		
整理調査員	青木善子・池田寛子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子		
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子		
遺構測量	株式会社写真測図研究所		

本報告書作成にあたっては、綿田弘美氏に多大なるご教示を賜った。記して感謝申し上げます。



第3節 調査日誌（抄）

[A区・B区] 調査日数32日

平成20年度

10月28日(火) A区(北)表土剥ぎ・遺構検出作業を開始。

10月30日(木) B区(北)表土剥ぎ・遺構検出作業を開始。

11月4日(火) 発掘作業員による遺構の掘り下げを開始。

11月10日(月) 体験学習(吉田小学校4年1組28名・4組29名)

11月11日(水) 体験学習(吉田小学校6年2組36名・3組35名)

11月13日(木) A区(北)、遺構測量委託。

11月14日(金) 体験学習(吉田小学校6年1組34名)。

11月17日(月) 体験学習(吉田小学校6年4組34名)。
A区(北)写真撮影を行う。

11月18日(火) 体験学習(吉田小学校4年2組29名・3組29名)。

11月19日(水) A区(北)における作業終了。両調査区の
写真撮影を行う。

11月20日(木) A区(北)2次面の重機掘削を行う。

11月21日(金) A区(北)・B区(北)、遺構測量委託。A
区(北)2次面において、グリッドを設定
する。

11月25日(火) B区(北)における作業終了。写真撮影を
行う。

11月27日(木) A区(南)表土剥ぎ・遺構検出作業を開始。

12月1日(月) A区(北)2次面、各グリッド完掘。写真
撮影を行う。A区(南)、遺構掘り下げ開
始。

12月2日(火) B区(南)表土剥ぎ・遺構検出作業を開始。

12月5日(金) 降雨のため現場作業中止。

12月11日(木) A・B区の写真撮影を行う。

12月12日(金) A・B区遺構測量委託。

12月15日(月) 結線作業。

12月16日(火) 土器取り上げを行う。本日で、A・B区
における発掘作業は終了する。



[C区・D区] 調査日数6日

平成20年度

1月6日(火) C区における作業開始。

1月7日(水) C区における作業終了。

1月8日(木) D区における作業開始。

1月14日(水) D区における作業終了。

本日をもって、本年度における吉田町東遺跡の発掘作業は全て終了。



第Ⅱ章 調査地周辺の環境

第1節 地理的環境

吉田古屋敷遺跡が所在する吉田地区は、浅川扇状地の中央部から扇端部に位置する（図2）。その浅川扇状地は、長野市北西部に位置する飯縄山（1,197 m）を水源とする浅川の堆積作用によって形成された扇状地である。浅川東条を扇頂に、南は城東・西和田で裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地に接している。扇頂側の勾配は1,000分の25あり、扇状地は南東方向に傾斜している。扇端側では1,000分の15と勾配が緩くなり、吉田町東遺跡が所在している吉田三丁目付近から勾配の緩みが始まる。また、浅川も吉田付近で上流域から中流域に移り、流水方向を南東から北東に進路を変えて、豊野で千曲川に合流する。

吉田地区には旧北国街道（現県道長野豊野線）が通っており、商業・宿場の町として発展。その後も、信越本線・長野電鉄の開通などにより交通網が整備され、人口が増加し、長野市近郊の住宅地に変貌した。それに合わせて、マンション建設や東急ライフの建設、北長野通り（旧SBC通り東端）の拡幅、辰巳隧道の開通など、北長野駅を中心とした再開発が行われるようになった。現在も、北長野駅周辺の宅地化が進んでいる。

第2節 考古学的環境

[浅川扇状地地域]（図2）

浅川扇状地には旧石器時代の遺構は確認されておらず、人々の活動の痕跡を確認できるのは縄文時代前期になってからである。松ノ木田遺跡は、浅川左岸に沿う微高地に立地し、微高地先端から上部に向かって前期・中期・後期の各段階において継続的に集落が営まれたと想定される。縄文時代前期の住居址が18軒、中期の敷石住居址などが2軒、後期の敷石住居址などが確認されている。その他の遺跡としては、浅川右岸沿いの浅川端遺跡からは前期前葉の住居址1軒、土坑1基が検出されている。後述するが、吉田地区の吉田古屋敷遺跡、吉田四ツ屋遺跡でも縄文時代中期・後期の遺構が確認されている。

弥生時代から浅川扇状地の本格的な集落域の形成が始まったと考えられる。主要な遺跡は檀田遺跡、浅川端遺跡、本村東沖遺跡、二ツ宮遺跡、本堀遺跡などがある。二ツ宮遺跡、本堀遺跡からは中期後半の住居址・溝・土坑が検出されている。集落遺跡としては、後期を主体とする本村東沖遺跡、後期初頭の吉田式土器の標識遺跡である吉田高校グラウンド遺跡などが挙げられ、当該期の集落形態を示す好例と言える。また、扇端部付近にあたる三輪遺跡や吉田地区の各遺跡内には、中期から後期にかけての住居址がまばらに存在している。このことから、扇端部は弥生時代中期から後期の集落域のはずれ、もしくは小規模な集落が展開していたと考えられる。

古墳時代の遺構は浅川扇状地の多くの遺跡で確認されているが、前期の遺構は少なく、主体となるのは中期から後期にかけての遺構で、浅川端遺跡、本村東沖遺跡、下宇木遺跡、三輪遺跡、桐原宮西遺跡、吉田地区においては古墳時代後期を主体としている。なかでも、本村東沖遺跡は大型住居址の集中・古式須恵器の大量保有・子持勾玉といった祭祀遺物の出土など、当該期の中心的集落であったことを窺わせる。また、吉田地区においても、吉田四ツ屋遺跡の墳丘墓の存在や、吉田古屋敷遺跡（A-2地区地点）でみられた大型住居の存在を考えると、吉田地区にもある程度の規模を持つ集落域が形成されていた可能性はある。

奈良・平安時代にかけては、比較的継続して遺構が確認されているが、大規模な集落が展開されていたとは認



図2 調査地周辺遺跡地図 (1 : 20,000)

番号	遺跡名	検出遺構時期	特記事項
1	松ノ木田遺跡	縄・弥	
2	湯谷古墳群	古	
3	本村東沖遺跡（長野高校地点）	弥・古	
4	本村東沖遺跡（上松東団地地点）	弥・古	円形周溝墓
5	浅川端遺跡	縄・弥・古・奈・平	馬形帯鉤
6	檀田遺跡	縄・弥・古・奈・平	円形周溝墓
7	神楽橋遺跡	弥・奈・平	
8	牟礼バイパス A 地点	縄・弥・古	
9	牟礼バイパス B 地点	古・平	
10	牟礼バイパス C 地点	平・中	銅椀
11	牟礼バイパス D 地点	弥・古・平	善光寺瓦
12	長野女子高校校庭遺跡	古	
13	下宇木遺跡	弥・古・平	
14	長野吉田高校グラウンド遺跡	弥	
15	三輪遺跡（三輪保育園改築事業地点）	弥・古・平	
16	三輪遺跡（三輪小学校地点）	弥・古・平	
17	三輪遺跡（滝沢マンション建設事業地点）	弥	
18	三輪遺跡（本郷住宅地地点）	古・平	
19	三輪遺跡（国鉄精算事業団本郷団地地点）	弥・古・奈・平・中	
20	三輪遺跡（県職員宿舎建設地点）	平・中	
21	桐原宮西遺跡	古・平	
22	吉田町東遺跡（宅地造成地点）	弥・古・平	
23	吉田町東遺跡（北長野通り・北長野（停）中俣線地点）	弥・古・奈・平	
24	吉田古屋敷遺跡（ドリームコート新築工事地点）	古	
25	吉田古屋敷遺跡（北長野駅前 A-2 地区市街地再開発事業地点）	弥・古・奈・平	住居内祭祀遺構
26	吉田古屋敷遺跡（北長野駅前 B-1 地区市街地再開発事業地点）	縄・弥・古・奈	縄文敷石住居
27	吉田古屋敷遺跡（ポレスターステーションシティ北長野建設地点）	弥・平	平安甕棺墓
28	吉田古屋敷遺跡（JR 吉田東町踏切除去一市道吉田朝陽線一事業地点）	縄・弥・古・奈	弥生木棺墓
29	吉田四ツ屋遺跡（グラントハイツ北長野開発事業地点）	縄・弥・古・奈	古墳周溝墓
30	辰巳池遺跡（アルピコ建設（株）吉田宅地造成地点）	縄・弥・奈・平	
31	稲添遺跡	平・中	瓦塔
32	柳田遺跡	古・奈・平	
33	本堀遺跡	弥・平	
34	二ツ宮遺跡	弥・古・奈・平	
35	樋爪遺跡	弥・古・奈	
36	権現堂遺跡	弥・古・奈・中	
37	平林東沖遺跡	古・平	
☆	本調査地点	弥・古・奈	土坑墓

表1 調査地周辺遺跡一覧表

められない。吉田地区でも奈良時代以降の遺構や遺物の出土は見られるが、相対的な検出量は少ない。扇端部の平林東沖遺跡では、該期の竪穴住居・掘立柱建物跡に加えて、ウシ埋納土坑やト骨が出土したことから、祭祀的性格を含んだ遺跡であるとみられている。また、浅川左岸の稲添遺跡からは瓦塔が出土し、さらに北に位置する牟礼バイパス C・D 地点出土の瓦類や、駒沢新町遺跡出土の懸仏鑄型などは、浅川扇状地の古代仏教文化を考える上で重要な遺物である。

[吉田地区] (図3)

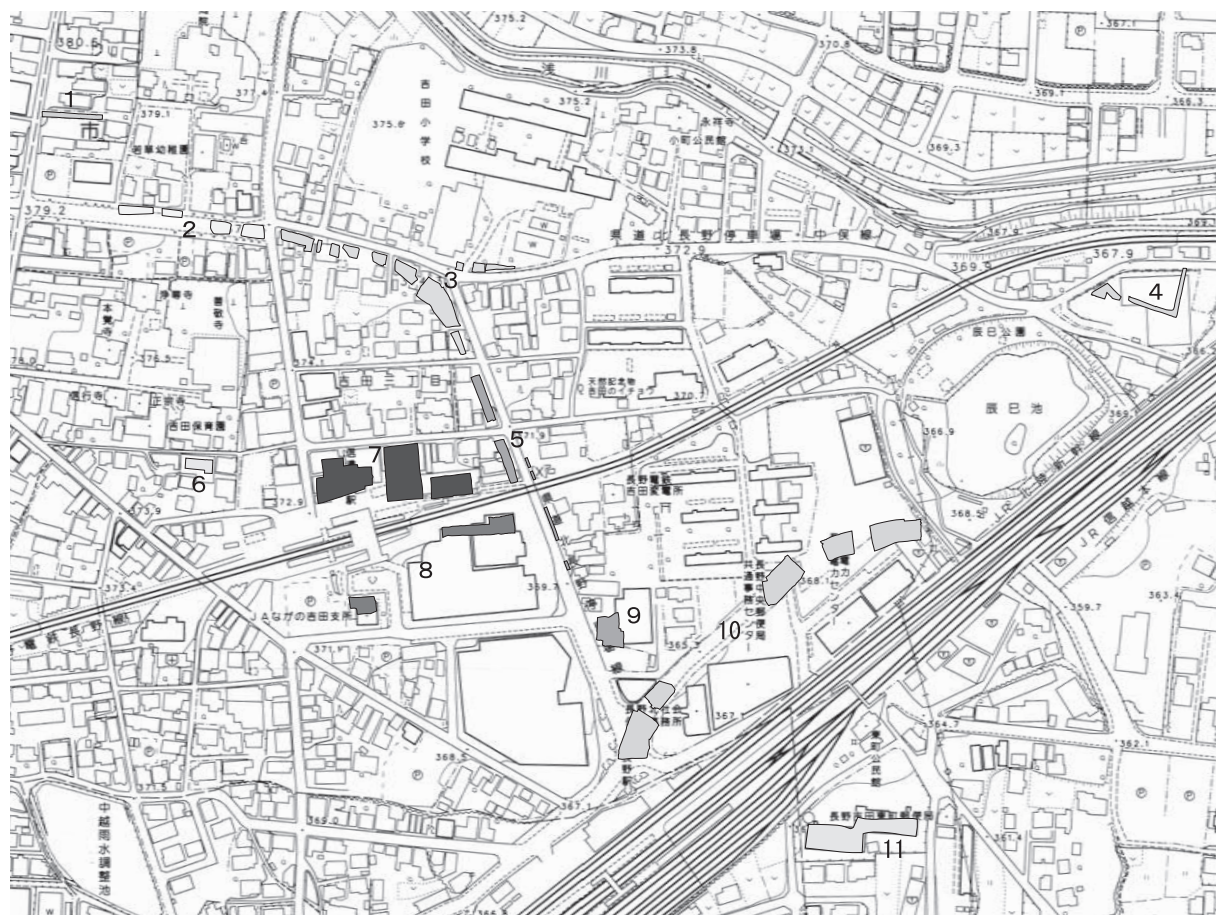
吉田地区においては本調査区を含め、計11ヶ所で発掘調査が行われている。以下、その概要について述べる。

1 吉田町東遺跡—宅地造成地点—

平成6年度に約200㎡の発掘調査を実施。弥生時代後期住居址2軒、同後期末から古墳時代初頭の大溝址2条、平安時代の住居址2軒を確認した。2条の大溝は同一遺構と考えられ、一辺14mの方形区画を呈するものと思われる。検出面や攪乱層から縄文時代中期の土器片が多量に出土しており、該期の遺構の存在が予想されている。

2 吉田町東遺跡—北長野通り地点—

平成6年度に約600㎡の発掘調査を実施。A～D区の調査区を設定している。住居址は弥生時代後期1軒、奈良時代3軒を確認。この他に溝址、土坑、浅川の旧流路と思われる河川跡も確認している。奈良時代の住居址で確認されたカマドは、住居廃絶時に破壊行動が行われたものと思われ、構築石材が散乱していた。また、付近からは長胴甕が伏せられた状態で出土している。



1：吉田町東遺跡(宅地造成地点) 2・3・5：吉田町東遺跡(2・5北長野通り・3北長野(停)中俣線地点) 4：辰見池遺跡
6～10：吉田古屋敷遺跡(6ドリームコートセブン新築工事地点・7A—2地区再開発地点・8B—1地区再開発地点・9ポレスターステーションシティ建設地点・10市道吉田朝陽線地点) 11：浅川扇状地遺跡群(新幹線地点) 12：吉田四ツ屋遺跡

図3 吉田地区発掘調査地点位置図(1:5,000)

3 吉田町東遺跡—北長野通り・北長野（停）中俣線地点—

平成14～16年度にかけて約1,150㎡の発掘調査を実施。北長野通り地点は平成14・15年度にA～J区の10区画を、北長野（停）中俣線地点は平成15・16年度にⅢ—A～C区の3区画を設定し発掘調査を行った。住居址は弥生時代中期3軒、同後期3軒、時期不明1軒、古墳時代後期10軒、奈良時代6軒、平安時代22軒を確認。この他に平安期の掘立柱建物跡1棟、井戸・土坑4基を確認している。調査から、弥生時代後期には集落が一端途絶え、古墳時代後期になって再び集落が形成され、平安時代まで続いていくことが見て取れる。また、カマドを検出した住居からは、古墳時代の一部を除いて住居廃棄とカマド破壊行動の連動性が想定されている。

4 辰巳池遺跡—アルピコ建設（株）吉田宅地造成地点—

平成15年度に約500㎡の発掘調査を実施。住居址は古墳時代前期1軒、奈良時代2軒、平安時代7軒の計10軒、土坑は弥生時代中期1基、平安時代2基の計3基、溝址は平安時代のものを4条確認した。これらの他に小穴を検出した。この他に縄文時代中期後半の土器が出土している。遺跡の性格としては浅川縁辺の小集落跡と考えられる。

6 吉田古屋敷遺跡—ドリームコート新築工事地点—

平成18年度に約130㎡の発掘調査を実施。古墳時代後期の住居址を3軒、性格不明遺構を1基と小穴群を確認した。狭い調査区ながらも古墳時代後期の住居址が確認されたことは、吉田地区西方の居住域の広がりを検討する上で重要である。

7 吉田古屋敷遺跡—北長野駅前 A-2 地区市街地再開発事業地点—

平成18～19年度にかけて約1,720㎡の発掘調査を実施。既存建物の解体工事などに伴い、Ⅰ～Ⅲ区にわけて発掘調査を行った。住居址は、弥生時代中期9軒、古墳時代中期後葉～後期末葉29軒、奈良・平安時代5軒を確認した。縄文時代の遺構は確認できなかったが、Ⅰ区3号性格不明遺構からは翡翠製の垂れ飾りが出土している。Ⅰ区3号住居跡（弥生時代中期）の壁溝からは石器の剥片が大量に出土していることから、石器の製作工房跡と考えられ、剥片資料のなかには接合できるものもあった。また、Ⅱ区25号住居跡の北西隅からは土器が規則性をもって並べられた状態で出土し、刀子・滑石製の白玉・土製の管玉も併せて出土しており、住居内における祭祀行為が行われた例であると考えられる。

8 吉田古屋敷遺跡—北長野駅前 B-1 地区市街地再開発事業地点—

平成7年度に約750㎡の発掘調査を実施。A・Bの2区画を設定。縄文時代後期前葉敷石住居址1軒・同中葉集石土坑1基・時期不明の溝址2条、弥生時代中期住居址2軒・環状溝址1基、同後期住居址1軒と木棺墓1基、古墳時代後期住居址5軒、奈良時代住居址1軒、中世溝址などを確認した。特記遺物として奈良時代の住居址から銅製丸軋が出土している。

9 吉田古屋敷遺跡—ポレスターステーションシティ北長野建設地点—

平成15年度に約200㎡の発掘調査を実施。調査地は全体的に攪乱が見られたが、弥生時代中期の住居址3軒・土坑1基、平安時代の合口甕棺墓を含む埋葬土坑2基を確認した。弥生時代中期の土坑は甕が正位の状態で置かれ、別個体の土器を蓋にしているものであったが、性格は不明である。平安時代の甕棺墓からは小児の歯が出土

している。この他に縄文時代後期の土器が出土している。

10 吉田古屋敷遺跡—JR 吉田東町踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点—

平成7年度から11年度にかけて約2,400㎡の発掘調査を実施。年度ごとにA～F区と区分けされており、縄文時代中期の住居址2軒・土坑10基・溝址1条、後期の敷石住居址（柄鏡式敷石住居址と見られている）・土坑9基を確認。弥生時代の遺構は中期の住居址3軒、後期の住居址5軒・木棺墓1基・土器棺墓1基・土坑10基・大溝1条を確認した。木棺墓からはガラス白玉・小玉、水晶丸玉が出土している。古墳時代の遺構は、前期とみられる溝址（環濠？）1基・性格不明溝址（方形周溝墓？）1基・土坑1基が確認された。平安時代以降の遺構や遺物は確認されたが、住居址などの居住遺構は確認されなかった。その中でも1基の土坑墓が確認され、仰臥屈葬状態の埋葬人骨を検出している。

11 浅川扇状地遺跡群—北陸新幹線建設地点—

平成5年度に（財）長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。JR北長野駅周辺（W11・12区）からは縄文時代中期後半の加曾利E系の埋甕が数個検出され、屋外埋葬が想定されている。他にも弥生時代後期の合口壺棺墓が出土している。

12 吉田四ツ屋遺跡—グランドハイツ北長野開発事業地点—

平成7年度に約1,300㎡の発掘調査を実施。縄文時代後期の住居址2軒、弥生時代中期の住居址4軒・同後期の住居址2軒・土器棺墓1基、古墳時代前期の住居址2軒・墳丘墓2基、平安時代の住居址6軒・溝址5条の他多くの土坑や小穴を確認した。土器棺墓からはガラス小玉・管玉が出土している。墳丘墓（SZ1）は前方後方形の周溝が巡るものと想定され、周溝の北側からは土器がまとまって出土している。もう一つの墳丘墓（SZ2）からは壺形埴輪と想定される口縁部の破片が出土している。

参考文献

- 長野市教育委員会1997 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡』長野市の埋蔵文化財第84集
- 長野市教育委員会2005 『浅川扇状地遺跡群 桐原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古屋敷遺跡(2)・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第108集
- 長野市教育委員会2006 『浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)』長野市の埋蔵文化財第112集
- 長野市教育委員会2007 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第118集
- 長野市教育委員会2007 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(4)・田牧居婦遺跡(2)』長野市の埋蔵文化財第119集
- 長野市教育委員会2008 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(5)』長野市の埋蔵文化財第120集

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査は、県道北長野通り線の拡幅工事に伴う発掘調査であったが、既存道路などの関係上、全面発掘はできず、発掘区を4つ（A～D区）にわけて調査をすることになった（図4）。A・B区が線路北側における拡幅分の道路と歩道部分にあたり、C・D区は線路南側における歩道部分にあたる。発掘調査の実施対象面積は932㎡以上であったが、既存建物や配管などの関係から実質的な調査面積は約448㎡であった。確認された遺構の総数は、竪穴式住居跡14軒（弥生時代2軒、古墳時代10軒、古代2軒）、土坑21基、溝跡7条、土坑墓1基であった。以下、調査区ごとに概略を述べる。

[A区]（図5）

平成20年10月28日から12月16日まで調査が行われた。排土の関係から2回に分けて表土剥ぎを実施。調査面積は約189㎡である。確認された遺構は、住居跡5軒（古墳時代4軒、古代1軒）、土坑16基、溝跡1条、多数の小穴であった。調査区の各所には、明治～現在にかけてのカクラン坑があり、一部は住居を著しく破壊しているほど大きなものもあった。しかし、一部のカクラン坑を掘り下げたところ、検出面下約50cmのところで炭化物を含んだ焼土を確認し、下層にも遺構が存在している可能性があるかと判断した。そのため、焼土が確認できたカクラン坑を中心に、重機による掘削を実施し、2次面の調査を行った。

住居の全体が確認できる遺構はなかったが、カマドが残存している住居は2軒確認できた。特に、6号住居跡のカマドは煙道の天井部分が崩落することなく良好な状態で残存していた。また、煙道の先端部分には土器がまとも出土しており、煙突の代用品として土器が使われていた可能性を指摘できる資料と思われる。

[B区]（図6）

平成20年10月30日から12月16日まで調査が行われた。こちらもA区と同様に2回に分けて表土剥ぎを実施した。調査面積は177㎡である。確認された遺構は、住居跡6軒（弥生時代2軒、古墳時代3軒、古代1軒）、土坑3基、多数の小穴であった。A区ほどではないが、B区もカクラン坑が点在し、南に行くにしたがって湧水がみられた。また、以前まで建っていた建築物の関係からか、地山は一部変色していた。

B区からは、吉田地区では遺構数が僅少な弥生時代後期の住居が確認され、床面からは土器もまとも出土している。

[C区]（図7）

平成21年1月6日・7日の2日間で調査が行われた。歩道部分の調査であったため掘削幅は狭く、配管の関係から、調査区をさらに2つにわけて掘削し、調査面積は合計で19㎡となった。確認された遺構は、住居跡1軒（時期不詳）、溝跡2条、であった。B区に近接しているためか、こちらの調査区でも湧水が著しかったが、地山の変色はみられず、きれいな黄色土であった。

検出された溝跡は中世以降のものとみられ、住居を南北に切る状態であった。また、溝に切られた住居跡は南辺と床面の一部しか確認できず、遺物もわずかしき出土しなかった。

[D区] (図7)

平成21年1月8日から1月14日まで調査が行われた。配管や排土の関係から、こちらは掘削を4回、調査区を2つに分けて調査し、調査面積は合計で46㎡となった。確認された遺構は、住居址2軒（古墳時代?）、土坑2基、土坑墓1基、溝址4条、多数の小穴であった。

C区に比べると湧水はなく、地山はより明瞭で遺構の遺存状態も良好であった。溝は、C区と同様に南北に伸びる状態で検出され、関連性が窺える。また、確認された土坑墓からは人骨が出土し、上半身と下半身の一部が残存していたが、副葬品などは検出できなかった。



地区	遺構名	時代	遺 構		特殊遺物等
			規模・形態	備考	
A	SB 1	奈良	隅丸方形 (4.70×5.0 m)	SD 1に重複	ミニチュア椀
	SB 3	古墳後期	隅丸方形? 規模不明		
	SB 4	古墳後期	隅丸方形 7.00×(5.40)m	壁溝	
	SB 5	古墳後期	隅丸方形 (5.50×3.60)m		
	SB 6	古墳後期	形態・規模不明		
	SK 1	時期不詳	隅丸方形 0.90×0.78 m	SD 1に重複	
	SK 2	時期不詳	不整隅丸長方形 1.45×0.90 m		
	SK 3	時期不詳	円形 径0.95 m	SK 4と重複	
	SK 4	時期不詳	不整円形 径0.75 m	SK 3と重複	
	SK 5	時期不詳	円形 径0.82 m	SK 6と重複	
	SK 6	時期不詳	不整円形 径0.80 m	SK 5・7と重複	
	SK 7	時期不詳	不整円形 径0.70 m	SK 6と重複	
	SK 8	時期不詳	不整円形 径0.70 m		
	SK 9	時期不詳	楕円形 1.20×0.80 m		
	SK 10	時期不詳	円形 径0.75 m		
	SK 11	時期不詳	不整円形 径1.05 m		
	SK 12	時期不詳	楕円形 0.80×0.55 m		
	SK 14	時期不詳	隅丸長方形 1.45×0.70 m		
	SK 15	時期不詳	円形 径1.05 m		
	SK 16	時期不詳	円形 径0.80 m		
SK 17	時期不詳	方形? 規模不明			
SD 1	弥生中期	幅2.70 m	SB 1・SK 1が重複		
B	SB 1	古墳後期	形態・規模不明	壁溝	石鏃
	SB 2	古墳後期	隅丸方形? 3.30 m×?		土偶
	SB 3	弥生中期	隅丸長方形 規模不明		
	SB 4	古墳後期	隅丸方形? 規模不明		
	SB 5	弥生後期	楕円形 4.55×(3.40)m		石鏃
	SB 6	奈良?	不整隅丸方形 規模不明		
	SK 1	時期不詳	楕円形 1.40 m		
	SK 2	時期不詳	円形 径1.20 m		
	SK 3	時期不詳	円形 径0.75 m		
C	SB 1	時期不詳	形態・規模不明	SD 1が重複	
	SD 1	時期不詳	形態・規模不明		
	SD 2	時期不詳	形態・規模不明	SB 1に重複	
D	SB 1	古墳?	隅丸方形? 規模不明	壁溝	
	SB 2	時期不詳	形態・規模不明		
	SK 1	時期不詳	隅丸方形 1.55×1.20 m		
	SK 2	時期不詳	形態・規模不明		
	SD 1	時期不詳	形態・規模不明		
	SD 2	時期不詳	幅0.90 m	SD 4と重複	
	SD 3	時期不詳	形態・規模不明		
	SD 4	時期不詳	幅0.30 m		
SJ 1	平安?	隅丸長方形 0.82×0.55 m	土壙墓		

表2 検出遺構一覧表

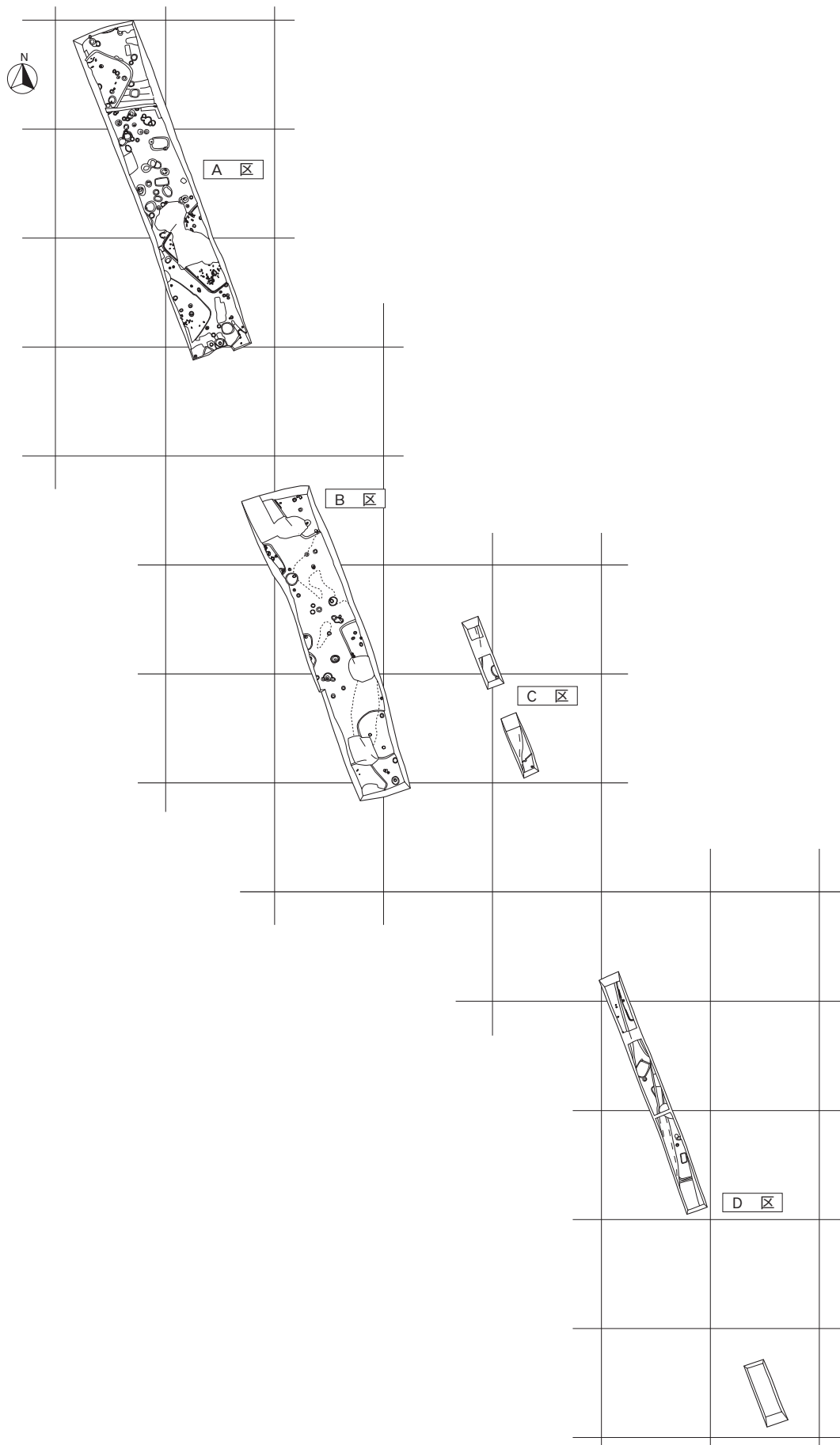


图4 調査区全体平面図 (S=1:500)

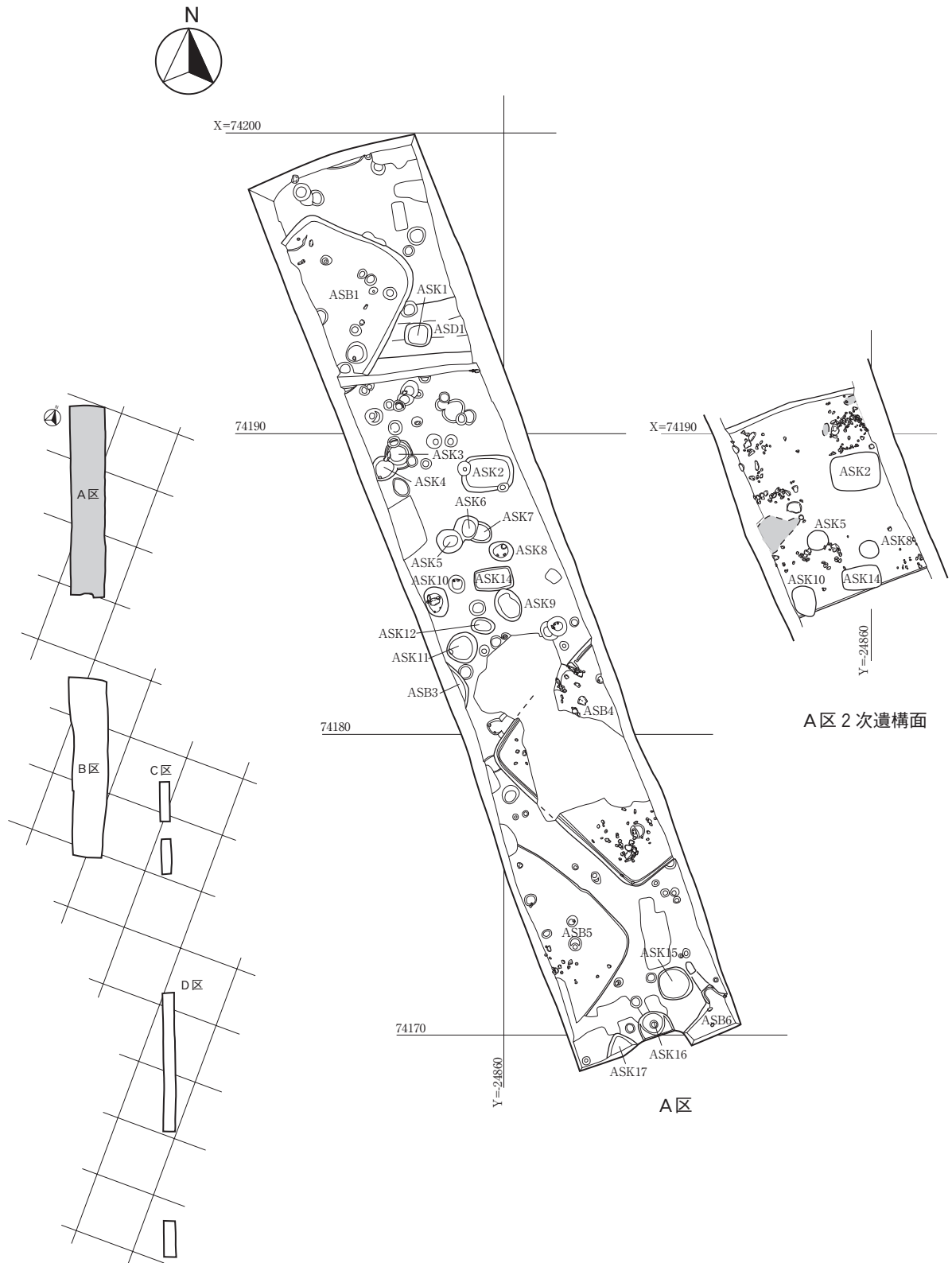


图5 A区遺構平面図（1：200）

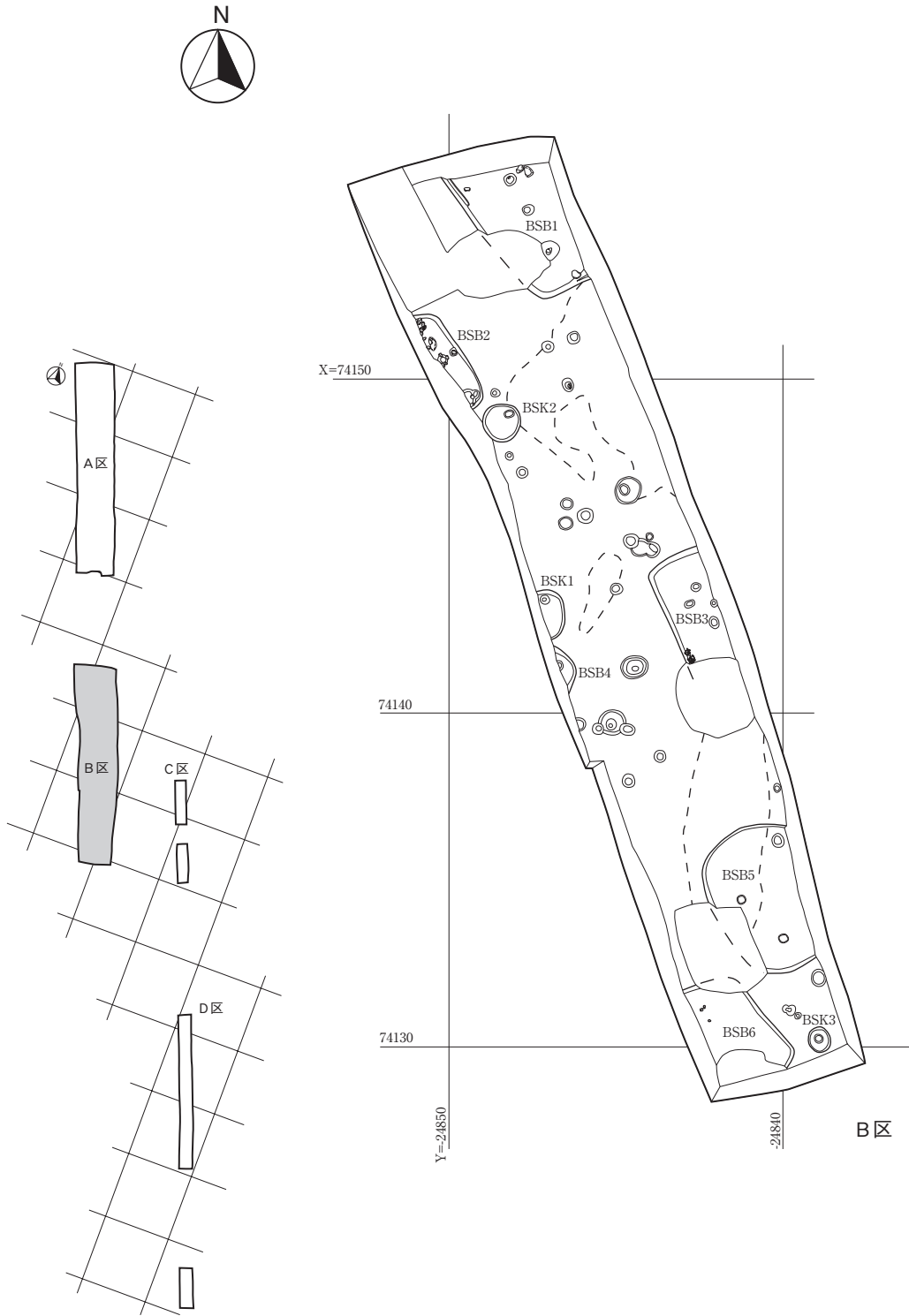


图 6 B 区遺構平面図 (1 : 200)

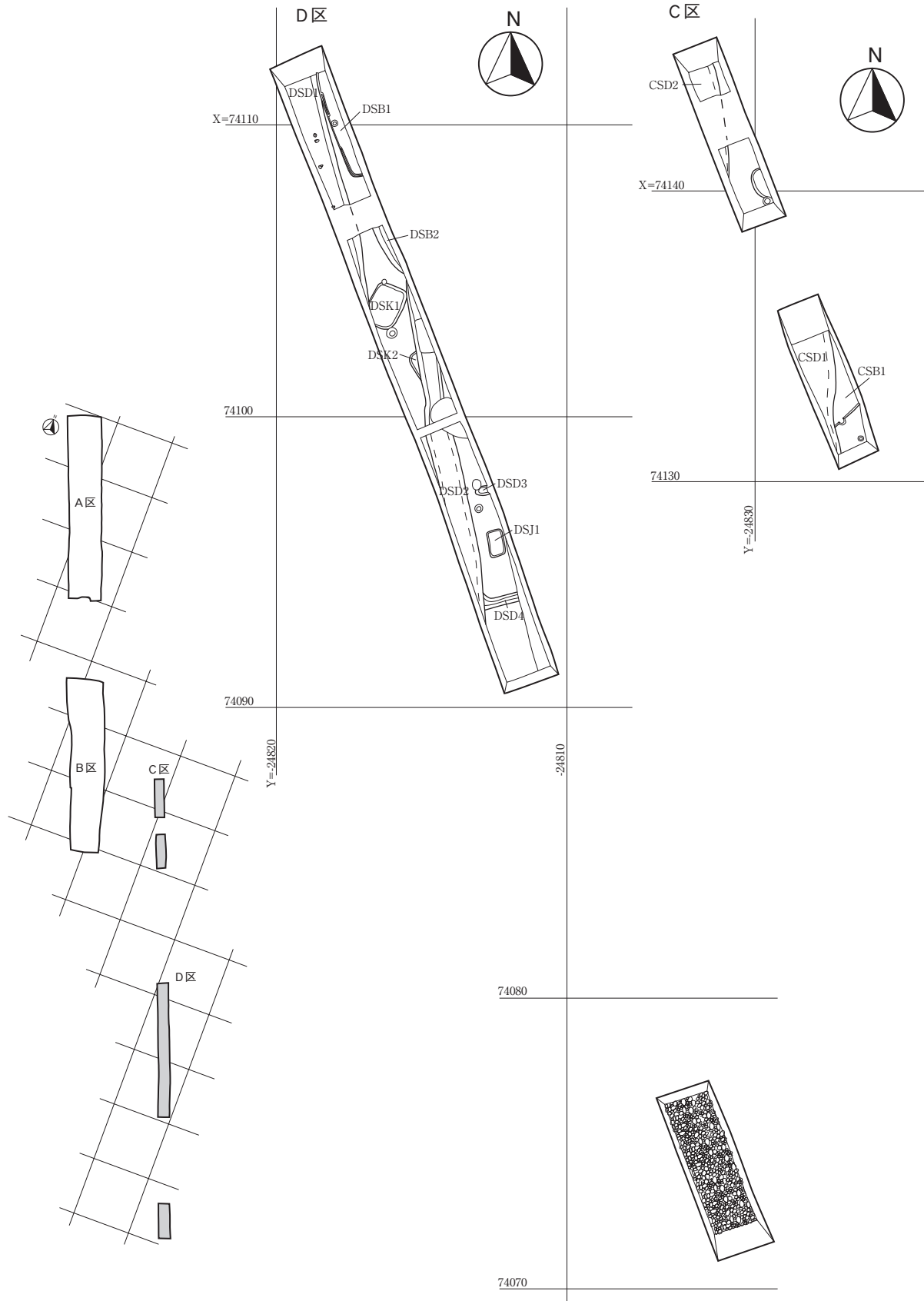


图7 C·D区遺構平面図(1:200)

第2節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属すると判断された遺構は、竪穴住居址2軒、溝址1本である。竪穴住居址は、2軒とも床面は貼り床を施さず、地山面をそのまま床にしている。また、住居内から炉と見られる痕跡は確認できなかった。当該期の住居址はB区のみで確認され、A区では溝址のみが確認されている。

B区3号住居址 (BSB3)

【遺構】 B区のほぼ中央、調査区東壁際に位置し、南北3m以上、東西2m以上の隅丸長方形を呈する住居址であると見られ、東側半分以上は、調査区外となる。また、住居の南側は攪乱坑によって破壊されている。

検出面から床面までは20cm前後を測り、床面は貼り床をせず、黄褐色の地山面をそのまま床にしていたものと見られる。

床面からまとまった土器の出土は見られず、柱穴と見られるピットがいくつか確認できただけである。

【遺物】 出土遺物には壺(図9 1・3~6)と甕(2・7・8)の破片がある。

出土土器より、弥生時代中期後半・栗林式期の住居址と判断される。

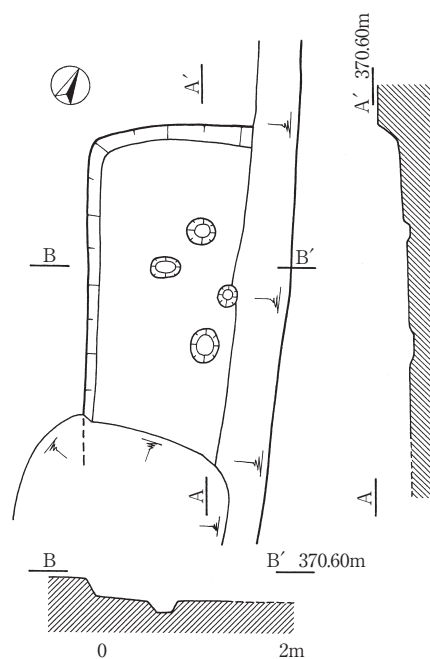


図8 B区3号住居址実測図(1:80)



B区3号住居址

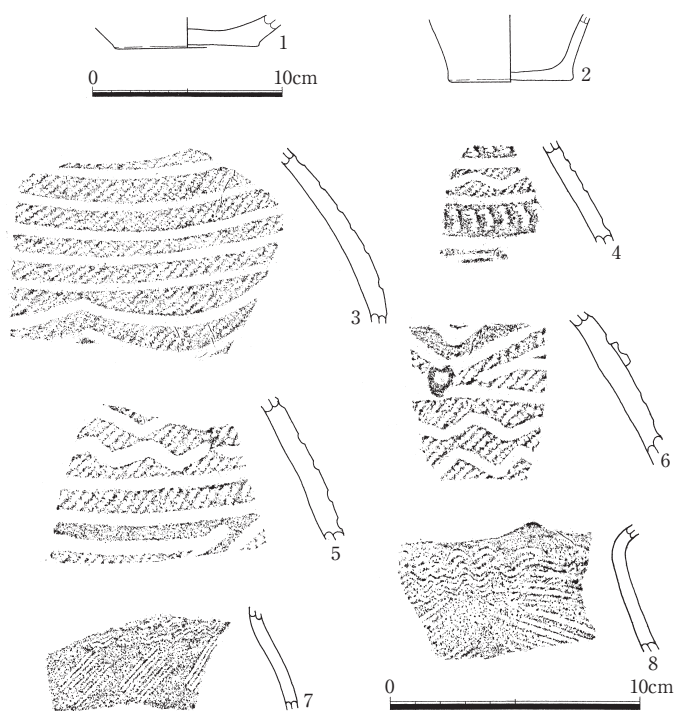


図9 B区3号住居址出土土器実測図・拓影

B区5号住居址 (BSB5)

【遺構】B区の南東隅に位置し、長径約4.5 mの楕円形を呈する住居址であるとみられ、住居の1/3は調査区外である。また、住居の西側の一部は攪乱坑によって破壊されている。

検出面から床面までは20 cm前後を測る。住居は流路跡と見られる砂礫層を一部掘り込んでおり、床面は貼り床をせず、砂礫層をそのまま床にしていたものと見られる。柱穴・炉等の施設は確認されていない。

床面からは土器の破片が大量に出土し、壁際からは大甕の破片がまとまって出土している。

【遺物】壺 (図11 1~3) と甕(4)が出土している。壺はいずれも口縁~頸部の破片である。(1)は頸部に2本の櫛描直線文を施文した後、篋描の鋸歯文を左周りに施文している。外面口頸部は縦方向のハケ整形痕をそのまま残すが、口縁端部は強い横ナデを施しハケ目を消している。

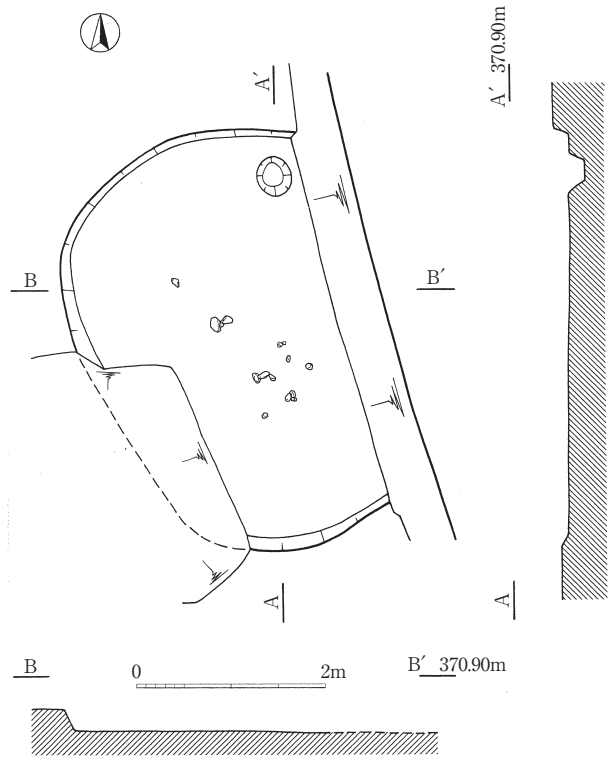


図10 B区5号住居址実測図 (1 : 80)

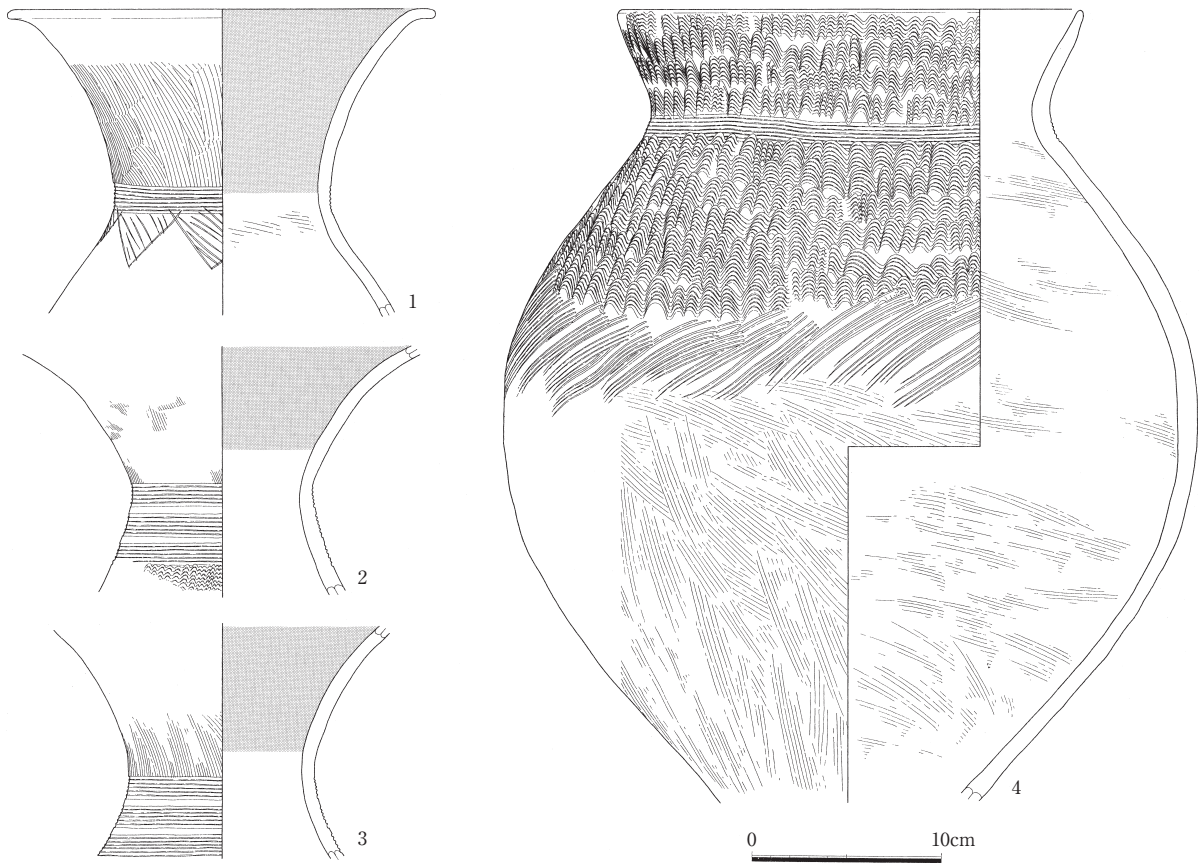


図11 B区5号住居址出土土器実測図 (1 : 4)

(2)は頸部に3帯の櫛描直線文と1帯の波状文、(3)は3帯の直線文が確認できる。いずれも外面口頸間にハケ整形痕を顕著にとどめ、口縁部内面は篋磨き赤彩される。(4)は胴部中位に最大径を有する大型の甕である。頸部に櫛描直線文を1帯施文した後、口縁部は下から上へ4帯の波状文、胴上半部は上から下へ7帯の波状文を施し、さらに胴中位に左下がりの短い斜線文を施している。胴部下半ならびに内面はハケ整形後軽い篋磨きがなされるが、ハケ痕を比較的顕著にとどめる。壺の頸部文様が櫛描文優位になっている点、甕の口縁部外面に波状文帯を持つ点などから、弥生時代後期前半吉田式期の後半段階と考えられる。



B区5号住居址

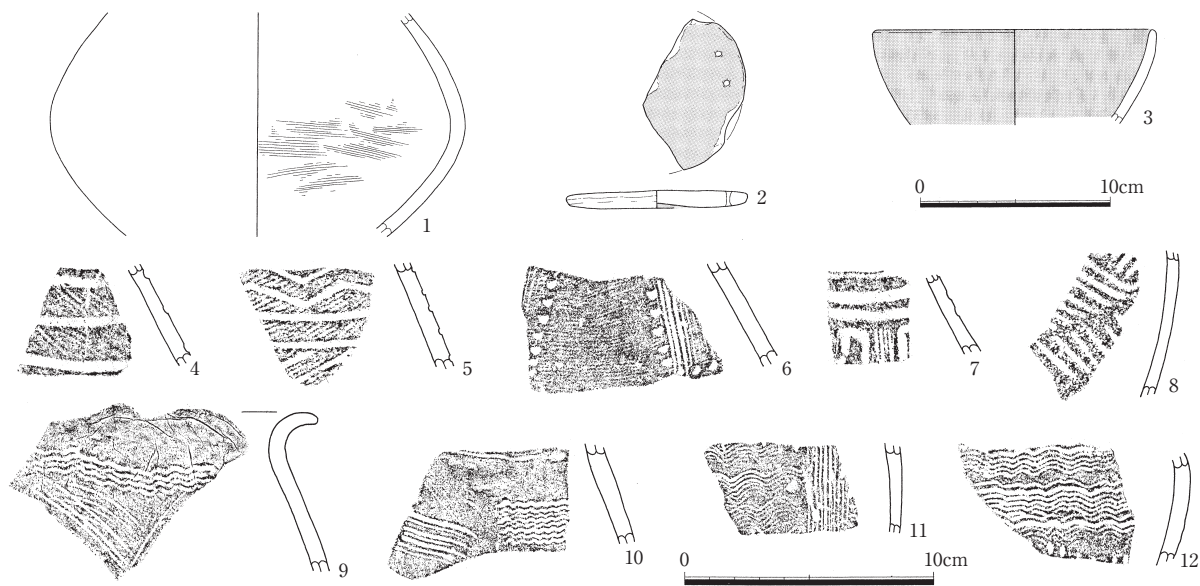


A区1号溝址

A区1号溝址 (ASD1)

【遺構】A区の北側で確認された東西方向に伸びる溝址で、溝の西側はASB1によって破壊され、溝の覆土内にはASK1が存在する。溝の断面は逆台形を呈し、底面は緩い傾斜を描いている。

【遺物】壺(図12 1・4~8)、甕(9~12)、壺用蓋(2)、杯(3)が出土している。蓋(2)は平らな円盤状を呈し、外面は篋磨き・赤彩され、端部に2個一対の緊縛孔を有する。出土土器の様相から、弥生時代中期後半・栗林式期と考えられる。



第12図 A区1号溝址出土土器実測図・拓影

2 古墳時代の遺構と遺物

A区3号住居址 (ASB3)

【遺構】A地区の中央、調査区西壁際に位置しているが、確認できたのが住居址南東隅の一部だけであったため、住居の全体像は判然としない。検出面から床面までは34 cmを測る。

床面からはまとまった土器の出土は無く、覆土中からも土器の出土は少なかった。図示しうる出土遺物は無い。

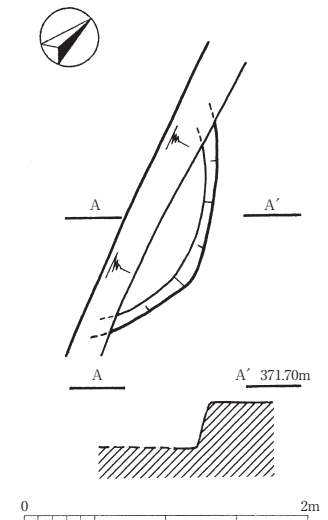


図13 A区3号住居址
実測図

A区4号住居址 (ASB4)

【遺構】A区の南半、調査区東壁際に位置し、南北7m、東西5.4m以上の隅丸方形を呈する大型の住居址である。住居址の中央部分には明治以降の攪乱坑によって大きく破壊されていたが、カマドは煙道部分が一部破壊されただけに留まっていた。検出面から床面までは23 cmを測り、床は黄色の貼り床であった。

検出できた遺構は、カマドを含む住居址中央部分、北西隅、南西隅で壁際には壁溝が確認されている。住居址南西隅の床面では円礫が多数出土しているが、規則性をもっているわけではなく、散乱している状態であった。また、柱穴とみられるピットが一つのみ確認されている。カマド以外の住居址床面からは目立った土器の出土は見られなかったが、覆土中には破片が多く含まれていた。

カマドは住居址北壁のほぼ中央に設置されているものと思われ、袖の構築材として川原石が使用されている。川原石はすべて立たせた状態で設置し、隙間を生めるように拳大の礫も使用されていた。

カマド内部の床面は被熱によって赤褐色に変色しており、支脚とみられる石と潰れた状態の壺が出土した。壺は口縁部から肩部にかけての個体で、口縁部を煙道側に向けて潰れていた。カマドの東袖脇からは逆位の状態で甕も出土している。

【遺物】土師器壺 (図16 1)・甕 (2)・碗 (3)が出土している。(1)はカマド内より潰れた状況で出土した壺であるが、外面は丁寧な篋磨きによって仕上げられ、口縁内面も篋磨きされる。

(2)は、口縁部に最大径を有する長胴甕で、外面は口縁から底部へ向けて

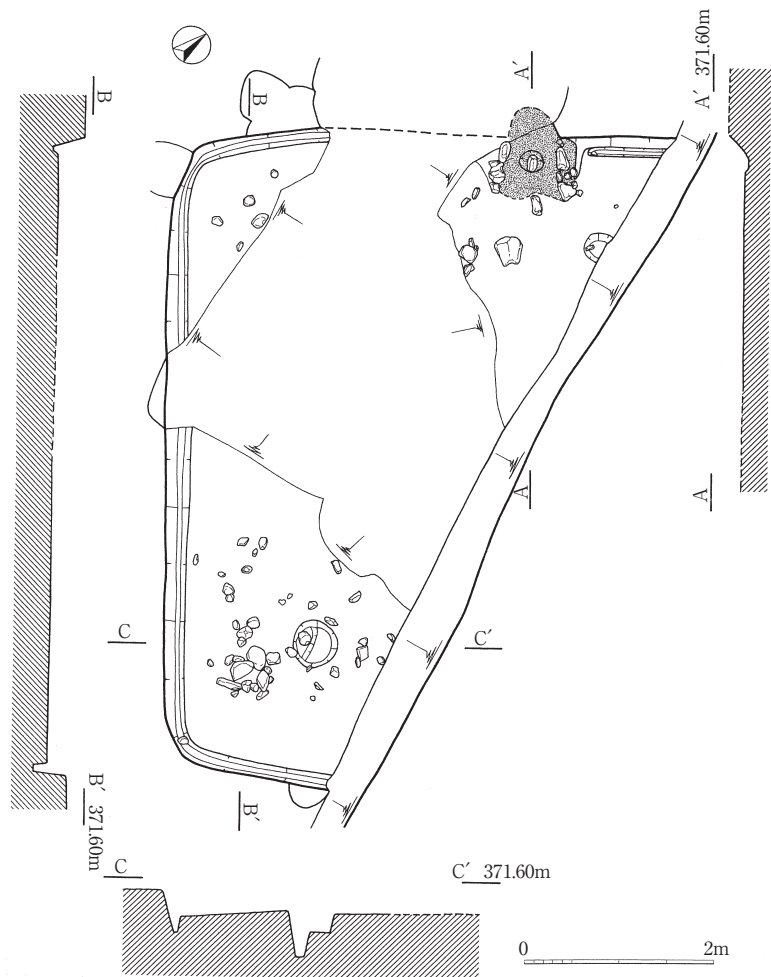


図14 A区4号住居址実測図 (1:80)



A区4号住居址



A区4号住居址カマド

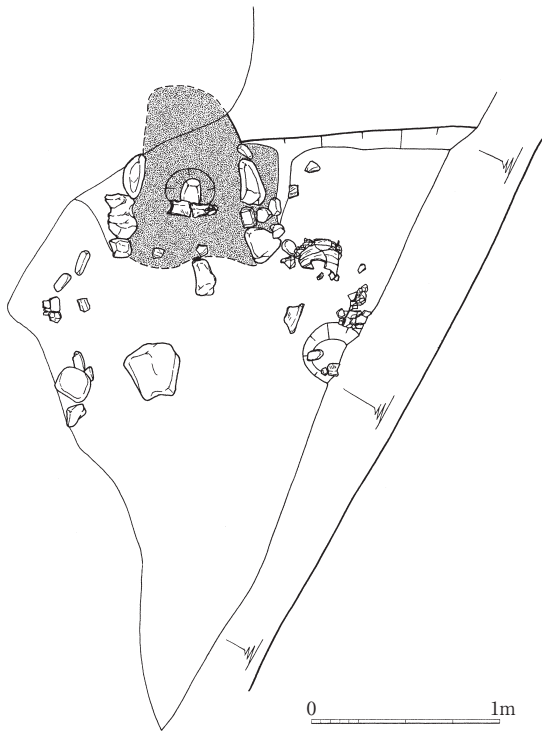


図15 A区4号住居址カマド付近実測図（1：40）

縦から斜方向の篋削りで仕上げられる。頸部付近は剥落が顕著に認められ、使用法に関わる痕跡と考えられる。口縁は横ナデによって仕上げられ、底部には木葉痕をそのままとどめる。内面は篋による平滑化がなされるが、粘土接合痕を顕著に残す。(3)は椀であるが器面の剥落が著しく、調整等詳細は不明である。

出土土器の様相から古墳時代後期の住居址と判断される。

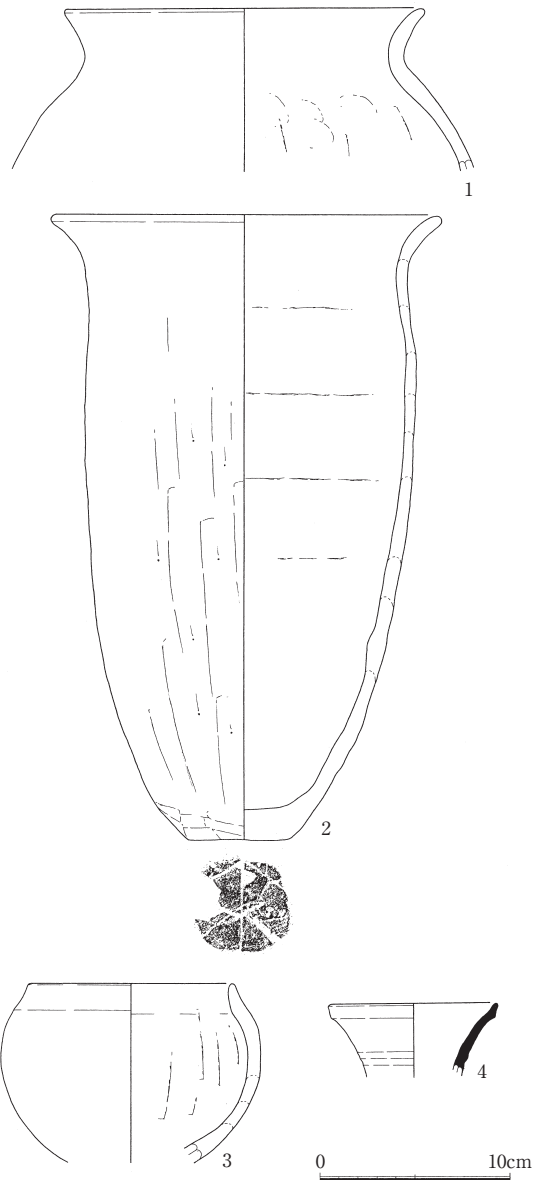


図16 A区4号住居址出土土器実測図



A区5号住居址

A区5号住居址 (ASB5)

【遺構】A区の南半、調査区西壁際に位置し、南北5.5 m以上、東西3.6 m以上の隅丸方形を呈する住居址と想定される。住居の北側と南側は攪乱がおよび一部破壊されている。検出面から床面までは13 cmと浅く、床は黄色の貼り床であった。

住居の東壁の中央部分は、一部折れるような形状になっているが、なぜこのような形状になったかは不明である。また、床面からは目立った遺物の出土は無く、礫が一部で散乱するような状況であった。柱穴も4本確認できたが、本住居址に伴うものかは不明である。

【遺物】土師器甕底部破片(図18 1・2)が出土しているのみである。(1)は長胴甕と考えられ、底部周辺に篋削りがなされる。(2)は小型甕であろうか。ともに底部には木葉痕をとどめる。古墳時代後期の住居址と想定される。

A区6号住居址 (ASB6)

【遺構】A区の南東隅に位置しているが、検出できたカマド以外の大部分は調査区外のため正確な住居の規模等は不明である。わずかに確認できた床面は検出面下40 cmで、床は黄色の貼り床であった。

検出当初、カマドは本体部の焼土が検出面で確認できていたが、煙道と見られる焼土範囲は確認できなかったため、煙道は消滅しているものと考えていた。そのため、カマドの北西検出面で出土した土器と一部の焼土は、隣接するSK15に付随するもので、カマドとの関連性は希薄であると見ていた。

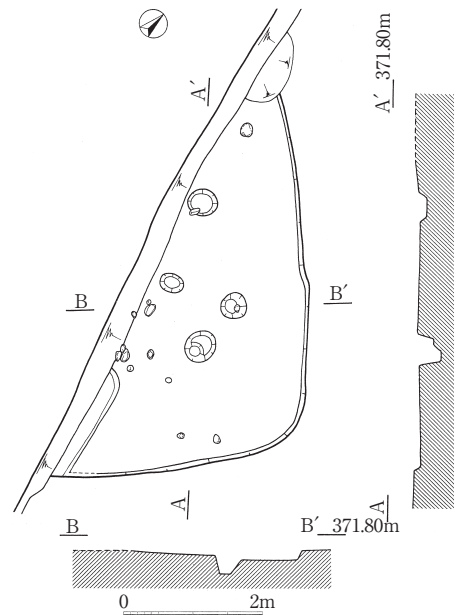


図17 A区5号住居址実測図(1:80)

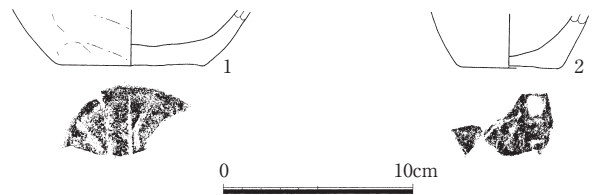


図18 A区5号住居址出土土器実測図

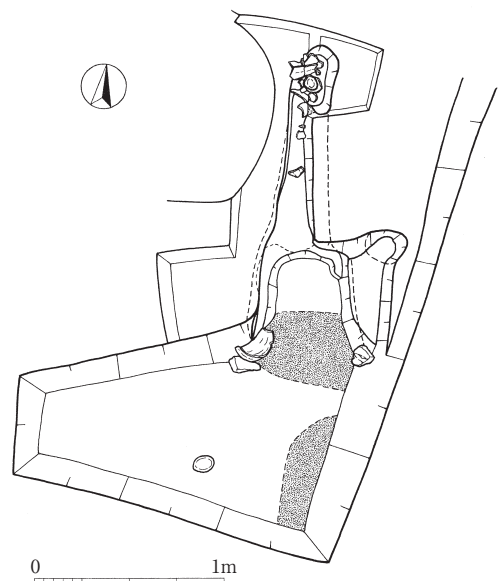


図19 A区6号住居址実測図(1:40)



A区6号住居址



カマド半截状況

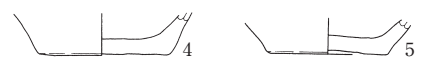
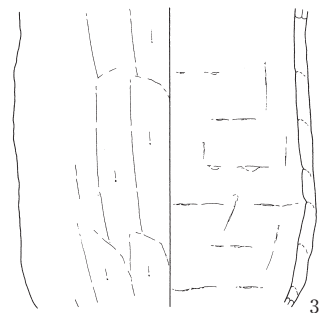
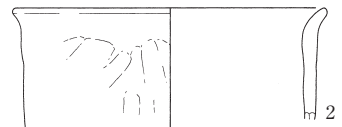
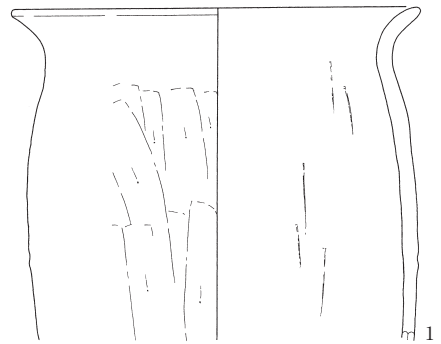


カマド完掘状況

しかし、カマド本体内の覆土を除去していくうちに煙道の天井が良好な状態で残存していることが判明し、カマド北西の焼土も煙道の先端部にあたるもので、土器も本住居址に伴うものであることが判明した。また、カマドは住居内に設置されず、住居の北壁を半円状に掘って構築しており、壁とカマドの交点を袖にしているようである。東袖は川原石を立てているが、西袖



煙道先端部土器出土状況



0 10cm

図20 A区6号住居址出土土器実測図

は甕の破損した胴部を転用しており、天井石とみられる石材は確認できなかった。

カマド本体から煙道の先端部までは220 cm と長く、トンネル状に覆土を除去することは難しいと判断したため、半截を行うと同時に煙道内の覆土堆積状況も合わせて確認することにした。半截の結果、煙道覆土内には土器が少なく、煙道の先端部のみに土器が集中していることも判明した。煙道先端部から出土した土器は甕で、前述したように煙道先端部に集中していたことから、煙道に付随していた煙突に転用されたものである可能性が指摘できる。実際に煙道の先端から出土した甕が煙突の資料であるならば、当時のカマドの構造を知る上で貴重な資料といえよう。

【遺物】土師器の長胴甕が5点出土している(図20 1~5)。(1)は口縁部に最大径を有し、口縁部は内外面とも横ナデによって仕上げられる。胴部外面は口縁から底部へ向けて、縦~斜方向の篔削り、内面は横方向の篔平滑化によって仕上げられる。(2)も口縁部に最大径を有するが、口縁は内外面横ナデされ、短く外反して終わる。胴部外面は、指頭による不定方向のケズリ状の強いナデ、内面は同じく横方向の強いナデによって仕上げられる。(3)は煙道の先端部より出土したもので胴部が筒状に遺存している。外面は縦方向の篔削り、内面は横方向の篔平滑化後ナデによって仕上げられている。(4)・(5)は底部破片である。古墳時代後期の所産と考えられる。

B区1号住居址 (BSB1)

【遺構】B地区の北東隅に位置し、南北5m以上、東西3m以上の隅丸方形を呈する住居址で、半分以上は調査区外となる。また、住居の西壁は一部攪乱により破壊されている。

検出面から床面までは25 cmを測り、床は黄色の貼り床であった。住居の西壁には壁溝が設置されており、柱穴と見られるピットが3本確認できた。床面からは甕が潰れた状態で出土しているが、それ以外に目立った遺物の出土は無かった。

【遺物】床面より潰れた状態で粗製の甕が一点出土している(図22 1)。胴部に最大径を有する小型の甕で、外面は粗い磨きもしくはナデ、内面は篔による平滑化後ナデ整形がなされる。古墳時代後期と想定される。

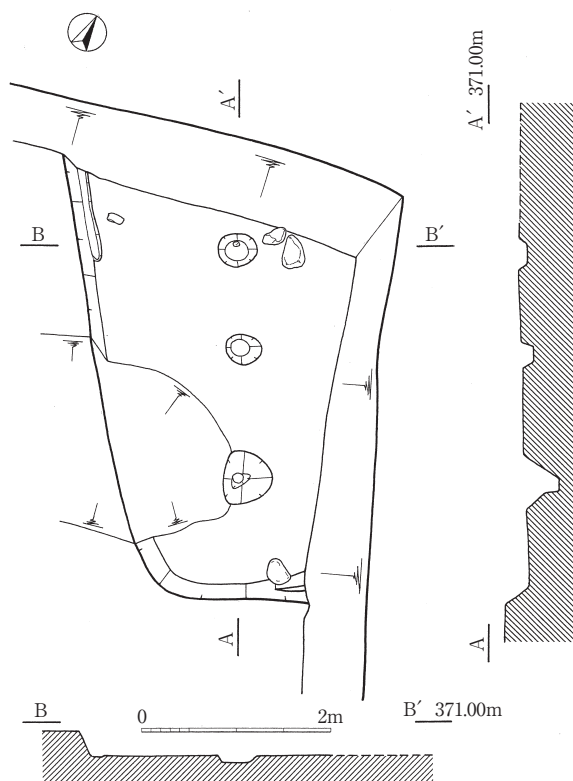


図21 B区1号住居址実測図(1:80)



B区1号住居址

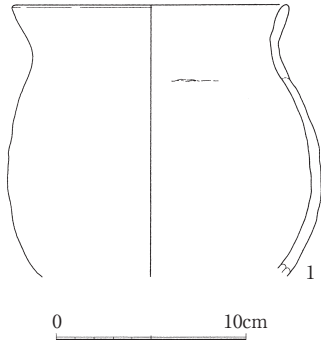


図22 B区1号住居址出土土器実測図



B区2号住居址

B区2号住居址 (BSB2)

【遺構】B地区の北西、調査区西壁際に位置し、南北3.3mの隅丸方形を呈する小型の住居址である。

半分以上は調査区外となる。検出面から床面までは13cmを測り、床は貼り床をせず地山面をそのまま床にしていたものと見られる。

【遺物】土師器甕の口縁部破片が2点出土している(図25 1・2)。(1)は胴部最大径が口径を上回る形態を呈し口縁部は短く外反して終わる。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面は左上がり、内面は横方向のハケによって仕上げられる。(2)は口縁部に最大径を有し、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。

古墳時代後期の所産と考えられる

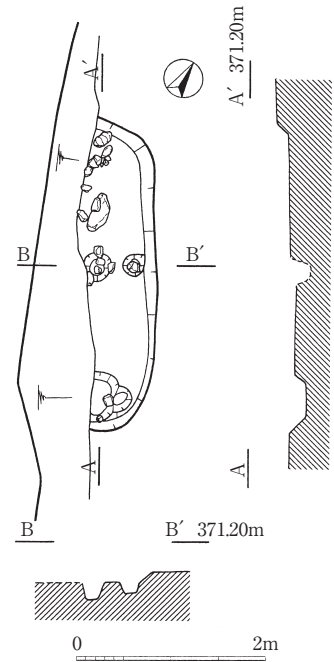


図23 B区2号住居址実測図

B区4号住居址 (BSB4)

【遺構】B地区のほぼ中央、調査区西壁際に位置し、隅丸長方形を呈する住居址と考えられるが、確認できたのは住居の南西隅だけであり、規模等詳細は不明である。検出面から床面までは40cmほどを測り、床は貼り床をせず地山面をそのまま床にしていたものとみられる。柱穴が一つ確認できたのみで、まとまった土器の出土も見られず、図示しうる遺物も無い。

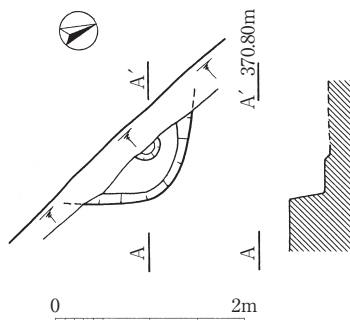


図24 B区4号住居址実測図

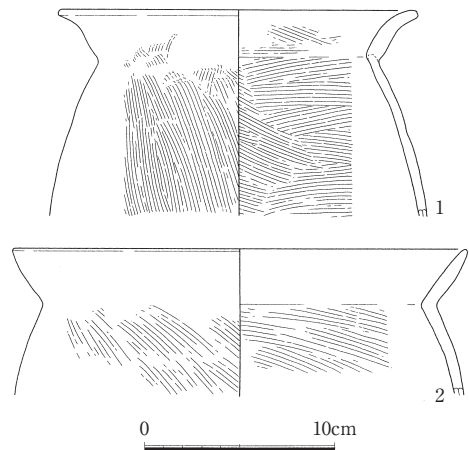


図25 B区2号住居址出土土器実測図

3 奈良・平安時代以降の遺構と遺物

A区1号住居址 (ASB1)

【遺構】A区が一番北側に位置し、南北4.7m、東西5mの隅丸方形を呈する住居址である。住居の南西隅は水道管が敷設されており、住居の一部が破壊されていた。検出面から床面までは28cmを測り、床は黄色の貼り床であったが、全面的に硬化しているわけではなかった。

住居の北東隅にはカマドの袖石とみられる川原石が逆「八」字状に検出されたが、床面からは浮いた状態であり、袖や煙道も確認されなかった。しかし、石の前面の床面は被熱によって赤褐色に変色していたことから、住居の北東隅にはカマドが設置されていたものと考えられ、住居廃絶時にカマドを破壊したのではないと思われる。

また、石と住居の壁の間からは土器がまともに出て出土し、一部は調査区の壁に埋没していたことから、調査区を拡張し土器の全面検出を行った。

【遺物】住居址北東隅を中心にして、壺(図28 1・2)、鉢(3)、甕(4~7)、把手付椀(8・9)、高杯(10~17)、杯(18)、ミニチュア(19)が出土している。(1)は壺の口縁でカマドの支脚に転用された可能性が高いものである。内外面ともに比較的丁寧な篋磨きによって仕上げられている。(2)は壺

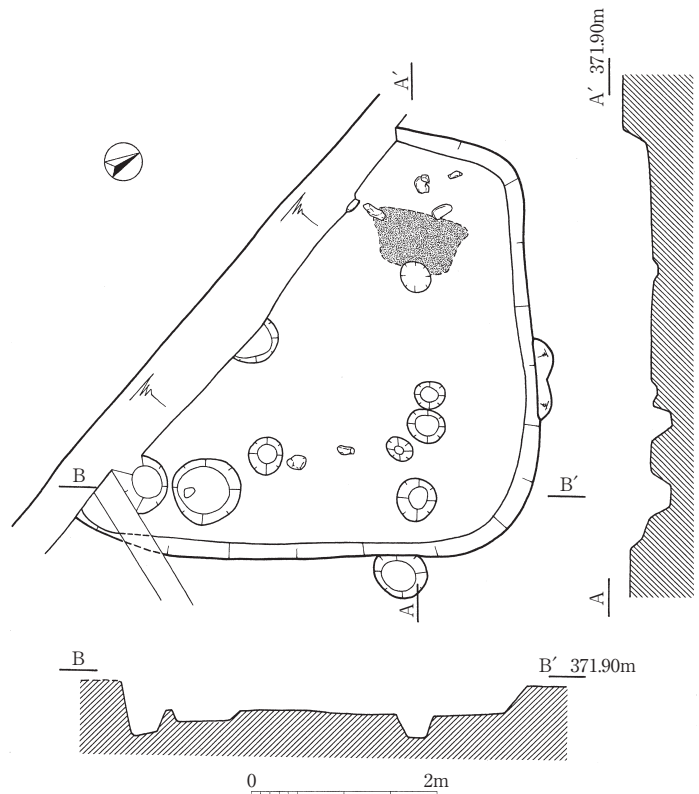


図26 A区1号住居址実測図 (1:80)



A区1号住居址

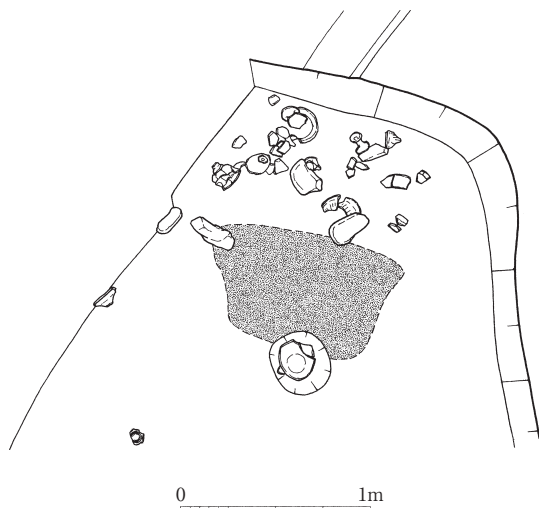


図27 A区1号住居址土器出土状況実測図 (1:40)



A区1号住居址土器出土状況

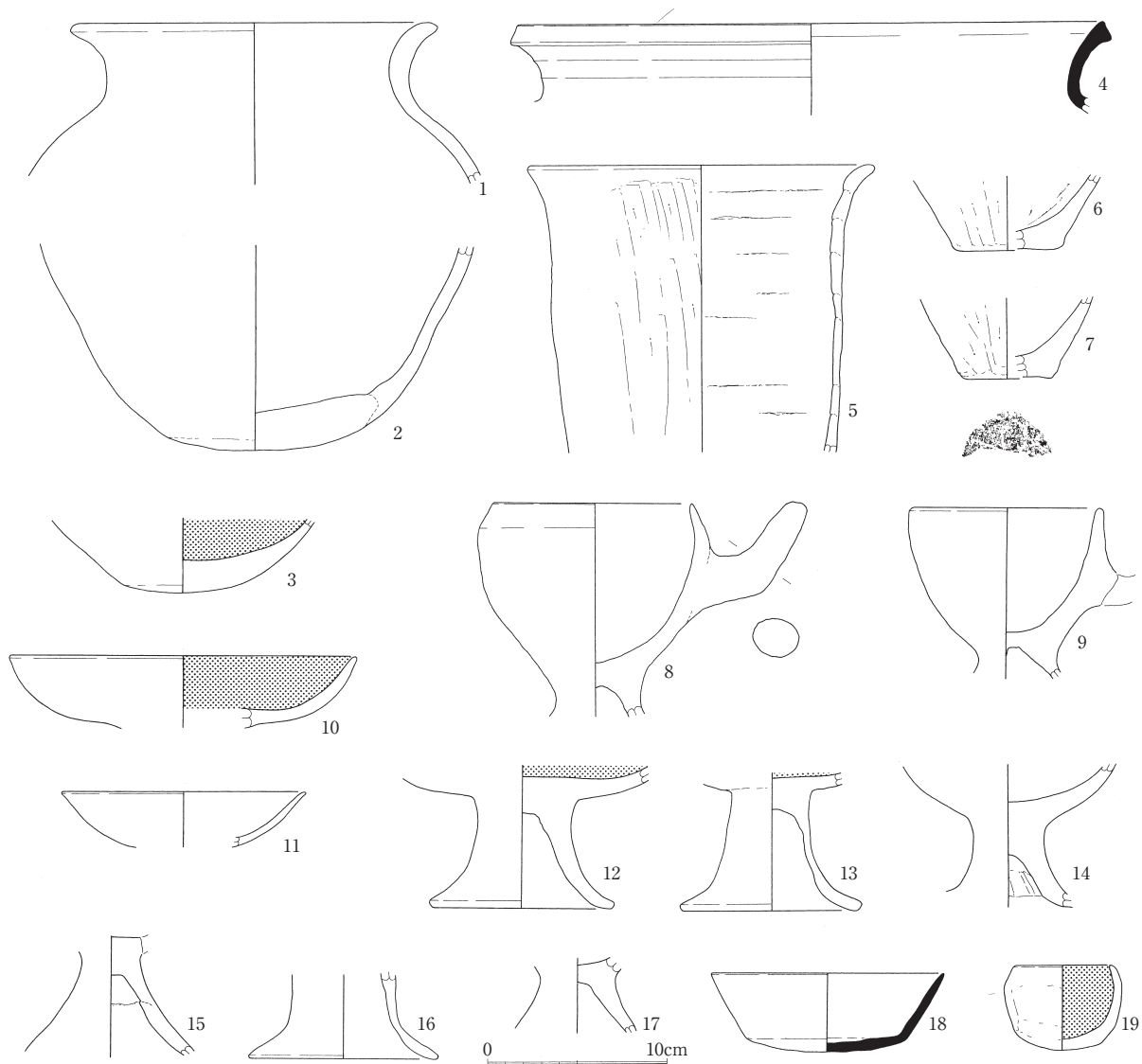


図28 A区1号住居址出土土器実測図(1:4)

の底部で丸底をなし粗い磨きがなされる。(3)は鉢で、内面は黒色処理されている。(4)は須恵器甕口縁部。(5)は口縁部に最大径を有する土師器甕で、口縁は短く外反して終り、口縁直下から縦方向の篋削りで仕上げられる。(6)・(7)は長胴甕の底部破片で(7)には木葉痕が認められる。(8)・(9)はともに牛角状の把手を持つ土師器の台付椀であるが、器面の荒れが著しく調整等詳細は不明である。(10)~(17)は土師器高杯。(18)は須恵器杯で、底部は静止篋ケズリで仕上げられる。(19)はミニチュアの椀で内面は黒色処理されている。

B区6号住居址 (BSB6)

【遺構】B地区の南西隅に位置し、南北3.7m、東西3m以上の隅丸方形を呈する小型の住居址であるとみられ、住居の半分は、調査区外となる。また、住居の北東隅の



B区6号住居址

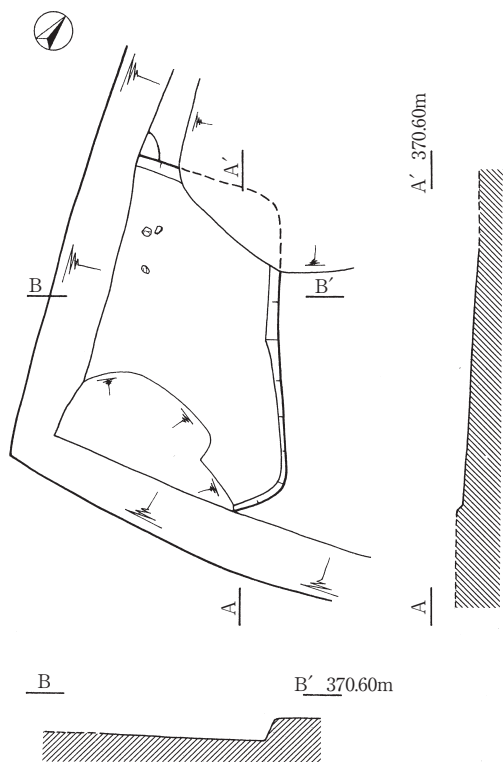


図29 B区6号住居址実測図(1:80)

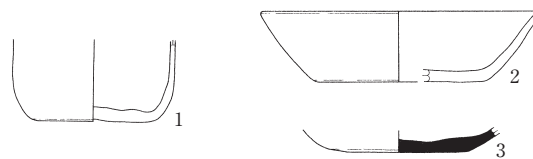


図30 B区6号住居址出土土器実測図(1:4)

一部は攪乱坑によって破壊されている。カマド・柱穴等の施設は確認されていない。

【遺物】(図30 1)は円筒形を呈する土器で、磨耗が著しく詳細不明であるが、内面はハケで仕上げられる。(2)・(3)は須恵器杯で、(2)は静止ケズリ、(3)は回転ケズリで底部が仕上げられている。

D区1号土坑墓(DSJ1)

【遺構】D区の南半で検出された土坑墓で、全長82cm、幅55cm、深さ10cmを測る長方形の小規模なものであった。埋葬されていた人骨は、頭部を北に向けた仰臥屈葬で、上半身が良好に遺存していたが、下半身は一部の大腿骨と見られる部位を残して消失していた。副葬品等は見られず、覆土内

にも目だった遺物は存在しなかった。人骨の年齢・性別等は不明である。

【遺物】図示しうる遺物等は出土していない。

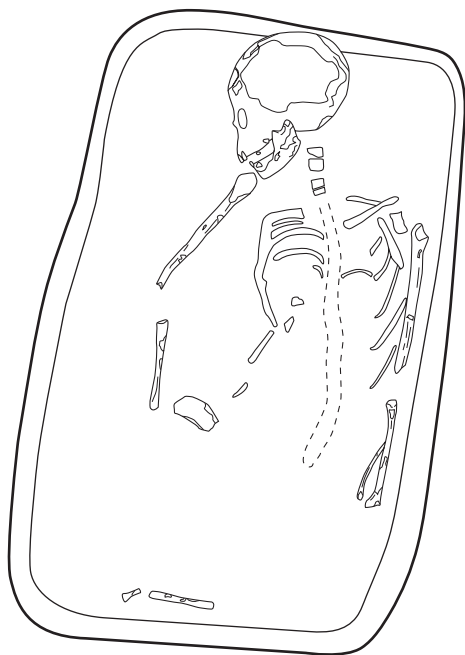


図31 D区1号土坑墓実測図(1:20)



D区1号土坑墓

No	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
B区3号住居址									
1	壺		7.5		完		匏磨き 底面：ナデ?	ナデ	
2	甕		6.6		1/2		匏磨き 底面：ナデ?	ナデ? (磨耗詳細不明)	
B区5号住居址									
1	壺	22.7			1/2		口縁：縦ハケ→端部のみ強横ナデ、他はハケ痕をそのまま残す 頸部：櫛直線文2→匏描鋸歯文 胴部：縦匏磨き	口縁：横匏磨き・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	
2	壺				1/3		口縁：ハケ→端部のみ強横ナデ 頸部：櫛直線文3→波状文	口縁：横匏磨き・赤彩 胴部：磨耗詳細不明	
3	壺				1/3		口縁：ハケ→端部のみ強横ナデ 他はハケ痕を顕著に残す。 頸部：櫛直線文3	口縁：横匏磨き・赤彩 胴部：磨耗詳細不明	
4	甕	24.7			2/3		口縁：櫛波状文4 (下→上) 頸部：櫛直線文 胴部上半：櫛波状文7 (上→下)→櫛単斜条痕 胴部下半：ハケ→軽い磨き	口縁：ハケ→横匏磨き 胴部：ハケ→軽い磨き	
A区1号溝址									
1	壺				1/6		匏磨き	ハケ→ナデ	
2	壺蓋				1/3		匏磨き・赤彩 2個一对の緊縛孔	匏磨き	
3	杯				1/10		匏磨き・赤彩	匏磨き・赤彩	
A区4号住居址									
1	壺	18.9			4/5		匏磨き	口縁：横匏磨き 胴部：指頭押捺調整→匏平滑化	
2	甕	20.6	5.3	33	3/4		口縁：横ナデ 胴部：縦匏ケズリ 底部：木葉痕	口縁：横ナデ 胴部：匏平滑化	
3	鉢	11.0			1/3		口縁：強横ナデ 胴部：剥落詳細不明	口縁：強横ナデ 胴部：匏平滑化	
4	長頸壺	9.0			1/3		ロクロナデ	ロクロナデ	
A区5号住居址									
1	甕		7.8		1/3		匏ケズリ 底面：木葉痕	匏ナデ→ナデ	
2	甕		5.4		1/3		匏ケズリ 底面：木葉痕	匏平滑化→ナデ	
A区6号住居址									
1	甕	21.5			2/3		口縁：横ナデ 胴部：縦匏ケズリ	口縁：横ナデ 胴部：匏平滑化	
2	甕	16.6			1/3		口縁：横ナデ 胴部：指頭によるケズリ状の不定方向の強ナデ	口縁：横ナデ 胴部：指頭による強いナデ	
3	甕				1/2		縦匏ケズリ	匏平滑化→ナデ	
4	甕		6.4		1/2		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
5	甕		6.9		3/4		匏ケズリ→ナデ 底面：匏削り	磨き状の擦痕	
B区1号住居址									
1	甕	14.6			2/3		口縁：ナデ 胴部：粗い磨きもしくはナデ	口縁：ナデ 胴部：匏平滑化→ナデ	
B区2号住居址									
1	甕	19.0			1/4		口縁：横ナデ 胴部：斜ハケ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ	
2	甕	24.0			1/5		口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ハケ	
A区1号住居址									
1	壺	20.4			3/4		口縁：縦匏磨き 胴部：横匏磨き	口縁：横匏磨き 胴部：匏ナデ	
2	壺		9.1		2/3		粗い横匏磨き	磨耗詳細不明	
3	鉢				完		匏ケズリ→粗い横匏磨き	匏磨き→黒色処理	
4	須恵甕	33.4			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	
5	甕	19.4			2/3		口縁：横ナデ 胴部：縦~斜匏ケズリ	口縁：横ナデ 胴部：横ナデ	
6	甕		6.6		1/3		縦匏ケズリ	匏平滑化	
7	甕		5		1/2		縦匏ケズリ 底面：木葉痕	ナデ	
8	台付杯	11.1			完		牛角状把手 口縁：横匏磨き 胴部：匏ケズリ→匏磨き	匏磨き	
9	台付杯	10.8			4/5		牛角状把手 口縁：横匏磨き 胴部：匏ケズリ→匏磨き	ナデ	
10	高杯	19.4			1/4		横匏磨き	匏磨き→黒色処理	
11	高杯	13.6			1/6		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
12	高杯		10.3		完		杯部：匏磨き 脚部：縦匏磨き	杯部：匏磨き→黒色処理 脚部：匏磨き	
13	高杯		10.1		2/3		杯部：匏磨き 脚部：縦匏磨き	杯部：匏磨き→黒色処理 脚部：匏磨き	
14	高杯				完		杯部：匏ケズリ→匏磨き 脚部：匏ケズリ→匏磨き	杯部：匏磨き? 脚部：匏ケズリ→ナデ	
15	高杯				2/3		磨耗詳細不明	杯部：匏磨き→黒色処理 脚部：磨耗詳細不明	
16	高杯		10.6		1/3		匏磨き	磨耗詳細不明	
17	高杯				3/4		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
18	須恵杯	13	8.8	4.4	1/3		ロクロナデ 底面：回転匏ケズリ→静止ナデ	ロクロナデ	
19	鉢	5.3		4.7	完		匏ケズリ→匏磨き	指ナデ→匏磨き→黒色処理	ミニチュア
B区6号住居址									
1	鉢		6.9		1/2		磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	
2	杯	14.7	8.8	3.7	1/2		ロクロナデ 底面：静止ケズリ	ロクロナデ	
3	須恵杯		7.6		1/2		ロクロナデ 底面：回転ケズリ	ロクロナデ	

表3 出土土器観察表

4 A区2次遺構面

表土除去の段階で、A区の西壁中央に位置していた攪乱坑の廃棄物を取り除いて土層を確認したところ、遺構検出面下50cmの層に炭化物を含む焼土層が確認され、2次遺構面の存在が判明した。その後、他の攪乱坑でも同様に検出面の下層を確認したが、焼土層が見られるのは一部だけであることが判明し、1次遺構面の調査終了後に、水道管より南側のみ、重機による掘削を行った。

重機による覆土除去は、攪乱坑にて確認された焼土層の上面で中止し、残りは作業員によって覆土除去を行うこととした。重機による覆土除去の時点で明確に遺構が確認できなかったため、一辺2mのグリッドを6区画設定し掘り下げることとした。以下、グリッドごとにその概要を述べる。なおグリッドの番号は北西隅から南東隅に向かってつけたものである。

【1グリッド】重機掘削の段階から円礫が検出されている状態であったが、覆土除去の結果、礫は散在しており規則性などは認められなかった。しかし、器面に文様が施されたミニチュア土器が、ほぼ完形の状態出土している。

【2グリッド】1グリッドと同様に、重機掘削の段階から円礫が検出されている状態であった。円礫は、円形状に配されているように検出されたが、中心部分から焼土などは検出できなかった。

【3グリッド】最初に焼土層を確認した位置に設定されたグリッドである。楕円形に広がる焼土範囲と扁平でやや大きな川原石は確認できたが、焼土に伴うと想定された住居址などの遺構はまったく確認できなかった。

【4グリッド】4グリッドは、上層のASK2が下層まで掘り込まれており、グリッド内の大半を占めていた。しかし、掘り下げたところ、焼土や礫の出土はみられなかった。

【5グリッド】5グリッドは焼土が確認された3グリッドの南に位置しているため、焼土に関連する遺構の検出が期待されたが、焼土は確認できず礫と土器片が出土したのみであった。

【6グリッド】覆土除去の結果、北に位置する4グリッドよりは礫が出土したが、目だった遺構は確認できなかった。しかし、調査区東壁際にトレンチを設定して掘り下げたところ、磨製石斧が割れた状態で出土している。

これまでも、北長野駅前B-1地区市街地再開発事業地点やJR吉田東町踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点では縄文時代の遺構が確認されていたため、本調査地点の2次遺構面においても当該期の遺構の確認が期待された。しかし、調査の結果、当該期の遺物は出土したが、検出された焼土範囲以外に明確な遺構を確認することはできなかった。

5 遺構に伴わない遺物

(1) 縄文時代の土器・土製品 (図32・33)

今回の調査では縄文時代の明確な遺構は確認されず、該期の資料のすべてが遺構外および他時期の遺構覆土からの出土である。ほとんどが破片資料で、器形復元が可能な資料は一部に限られる。大半は堀ノ内2式および加曾利B1式の範囲内で捉えられるもので、前後の時期のものが若干含まれる。

堀ノ内2式併行期の土器 (3~6、29)

3、4は胴部上半が外反する鉢形土器で内面に沈線が巡り、4は渦巻文が入る。5は口縁部が内傾する深鉢で、紐線が2本添付され、口縁部小突起の下に3つの刺突がある短い添付文が2本垂下する。さらに小突起内面には渦巻文が施される。器面は丁寧に磨かれており、黒褐色を呈する。6の外面には紐線の剥落した痕跡が認められる。内面には多条沈線を巡らし、口唇部にも浅い凹線が施される。29は注口土器の把手部。

加曾利B1・B2式併行期の土器 (7~19、27、28)

7~11は内外面に多条沈線が巡る深鉢。8は多条沈線間にLRの縄文が充填され、口唇部には刻みが施される。9~11は外面の多条沈線が縦短沈線により階段状に区切られる。いずれも器面は丁寧に磨かれている。12は摩滅が激しいが2条の沈線間にLRの縄文が充填され、内面には4条の沈線が巡る。15は内面に多条沈線による2つの横帯をもつ浅鉢で、沈線間にLRの縄文を交互充填している。13、14は精粗中間土器といえるもので、13は2条の沈線間に弧線状の沈線が入る。14は帯縄文が2帯巡り、それを区切る単位文が入れられる。内面には2条の沈線により隆起線状の突帯が表出されている。16~18は口縁部が内傾する深鉢で、17は口唇部に刻みが施される。19は小型の深鉢で2条の沈線間にLRの縄文が充填され、その帯縄文を区切るように対弧文が4単位施される。27は注口土器の注口部で、土器本体との接合部で破損している。28は口縁部付近の破片で、多条沈線に渦巻文が入る。注口土器を除けば、7~15が加曾利B1式期、16~19が加曾利B2式期に比定されよう。

その他の土器 (1、2、20~26)

1は沈線内にLRの縄文を縦位に施文する。小片のため判断が難しいが後期初頭称名寺式期に比定されよう。2は胴部に渦巻文をもつ深鉢と思われる。堀ノ内1式に比定される。20、21は深鉢底部で、いずれも2本超え1本潜り左1本送りの網代圧痕がある。22~26は口縁部が肥厚し、胴部屈曲部から口縁部にかけてやや内傾ぎみに外反する深鉢で、沈線と並行して配置された連続刺突文によって入組文様を表出される。22~24は同一個体と思われる、幅広の沈線に半截竹管による連続刺突文が並行して配置される。色調は灰色を呈し、胎土にはφ1~2mmの鉤物が比較的多く認められる。25と26は別個体であるが、沈線と円形刺突の連続刺突文が並行に配置されその中にLR単節縄文が充填されているほか、口唇部に沈線が入る。器面は内外面ともに丁寧に磨かれており、色調は黒褐色を呈する。胎土中の鉤物はφ1mm以下のものがほとんどで、量も少ない。これらの土器はその文様構成から後期中葉の東北地方北部に主に分布する十腰内2式土器に比定されよう。当地域では極めて出土例が少ない土器で、市内では猪平遺跡出土の1点と、今回の調査区と近接し、本来的には同一遺跡と考えられる吉田古屋敷遺跡で5点(いずれも破片資料)が出土するのみで、県内でも岩下遺跡(小諸市)117号土坑出土の台付深鉢が器形復元できるほかは、岡ノ峯遺跡(山ノ内町)、明専寺遺跡(飯綱町)、深町遺跡(旧東部町)で破片資料が認められるのみである。

土製品 (30~32)

30はミニチュア土器で、X字状斜行文が入る。31は仮面土偶の仮面部分である。竹管状工具によって口と鼻の穴が表現されている。32は土製円盤。

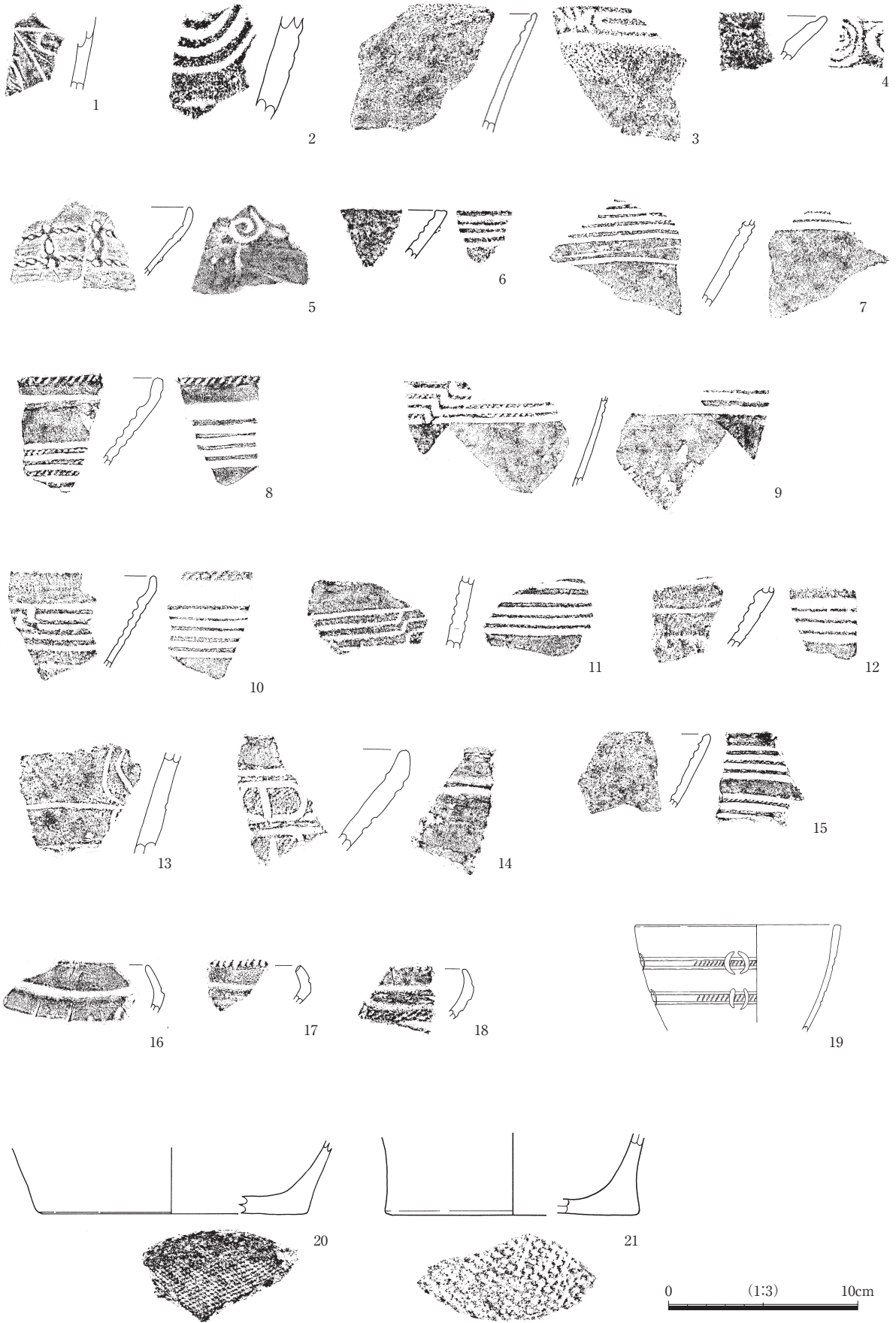


図32 縄文時代の土器・土製品(1)

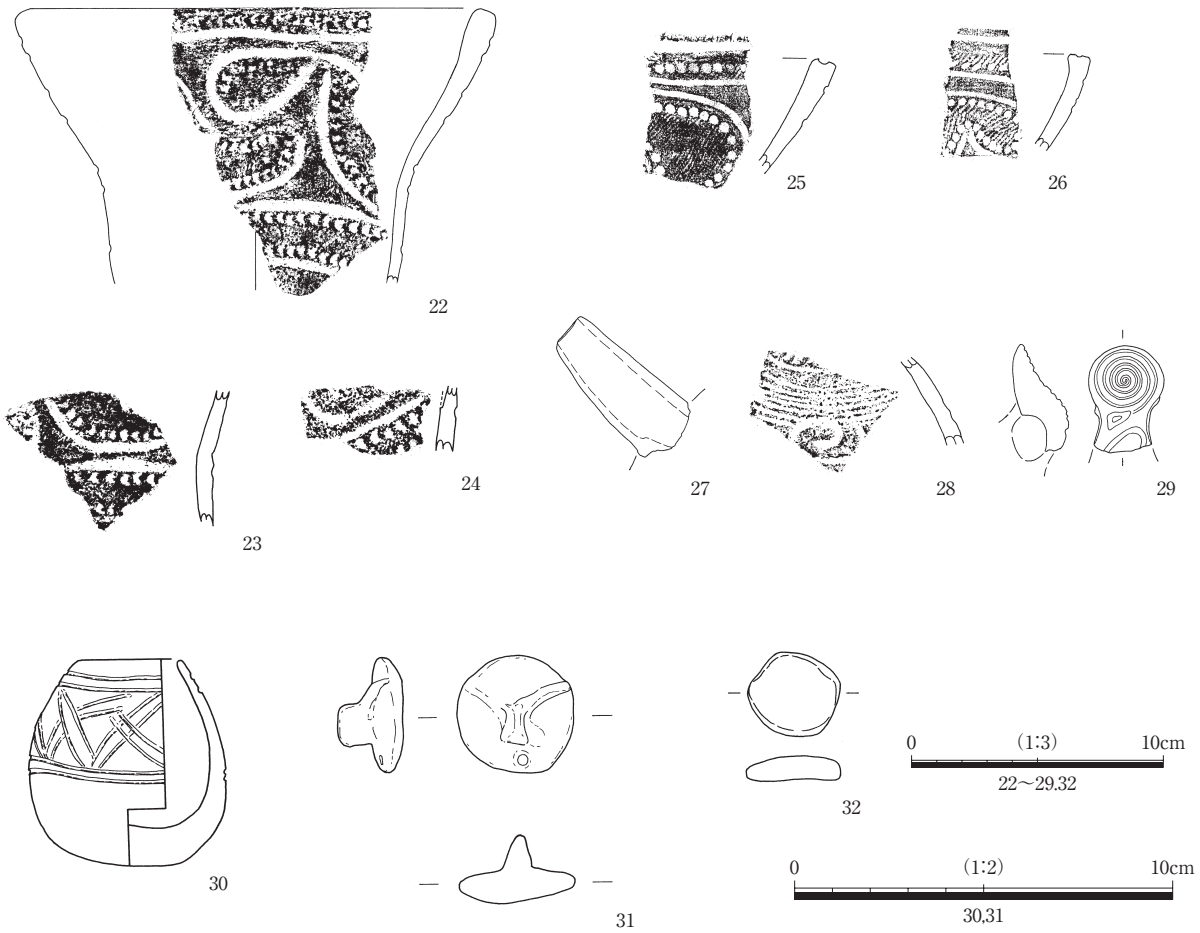


図33 縄文時代の土器・土製品(2)

(2) 石器 (図34・35)

今回の調査では最大長2 cm以下の碎片を除き、102点の石器が出土している。出土状況からは石器群としてのまとまりを認めることはできない。本調査で出土した土器の時期から、資料のほとんどが縄文時代後期後半もしくは弥生時代中期後半に帰属すると考えられる。ここでは主に定形的な石器を図化することとしたが、加えて、剥片石器石材の搬入形態が窺える資料を図化している。

1～4は石鏃、5は石鏃未成品である。1は黒曜石製で脚部が欠損している。裏面に自然面が残る。2は珪質頁岩製で、表裏面に素材面を残す。3は無斑晶質安山岩製で先端部に衝撃剥離痕が認められる。4は黒色安山岩製で側縁に微細な押圧剥離を施し鋸歯状に仕上げている。5は鉄石英製の未成品。6は無斑晶質安山岩製の石錐で先端部は欠損する。7は流紋岩製の搔器。12は小型の打製石斧で、刃部に使用によるものと考えられる磨滅が認められる。13は凝灰岩製の定角式磨製石斧で、刃部方向から石斧の稜に沿って剥離が入っている。14は粘板岩製の磨製石器の一部分。研磨方向は表裏面ともに同一方向で片方の側面にも研磨部分が残る。15は上下両端に面的に敲打痕が認められる敲石。16は磨石で一部敲打痕がある。8～11は剥片石器石材の石核である。8は黒曜石の石核で今回の調査で出土した黒曜石石核のうち最大のものである。6面すべてに自然面が残されている。図化しなかった黒曜石石核についても同様に自然面を複数の面に残すものがほとんどである。加えて、剥片類でこれら石核の寸法を大きく上回るものは出土しておらず、ほとんどが背面に自然面を残す。9は鉄石英の石核。図化しなかったものも類似した大きさである。10は無斑晶質安山岩の石核で、節理に沿って剥がされた板状剥片を石核素材としている。11は流紋岩の石核で、打面転移を頻繁に行う。この石材は節理が発達するが、必ずしも節理に沿った剥離は行われていない。自然面を大きく残すが円磨は進んでおらず、露頭付近から採取し遺跡へ搬入されたものと思われる。

(3) 金属器・ガラス玉

1はガラス玉。出土状況から明確な時期決定はできないが、近世以降のものと思われる。2は鉄鎌で長さ15.1 cm・幅3.6 cmを測る。3は寛永通宝。いずれもB区検出面から出土している。

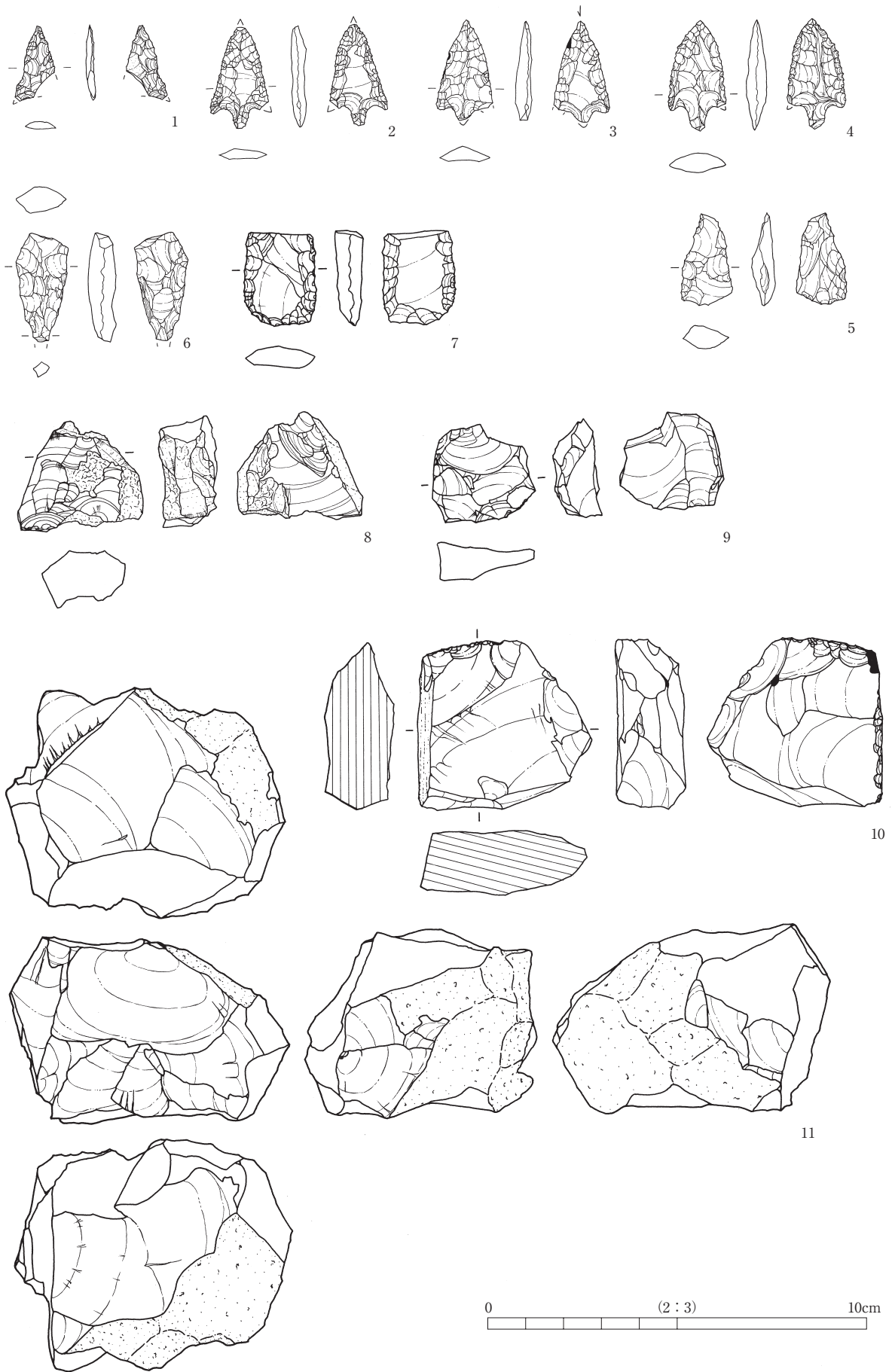


图34 石器(1)

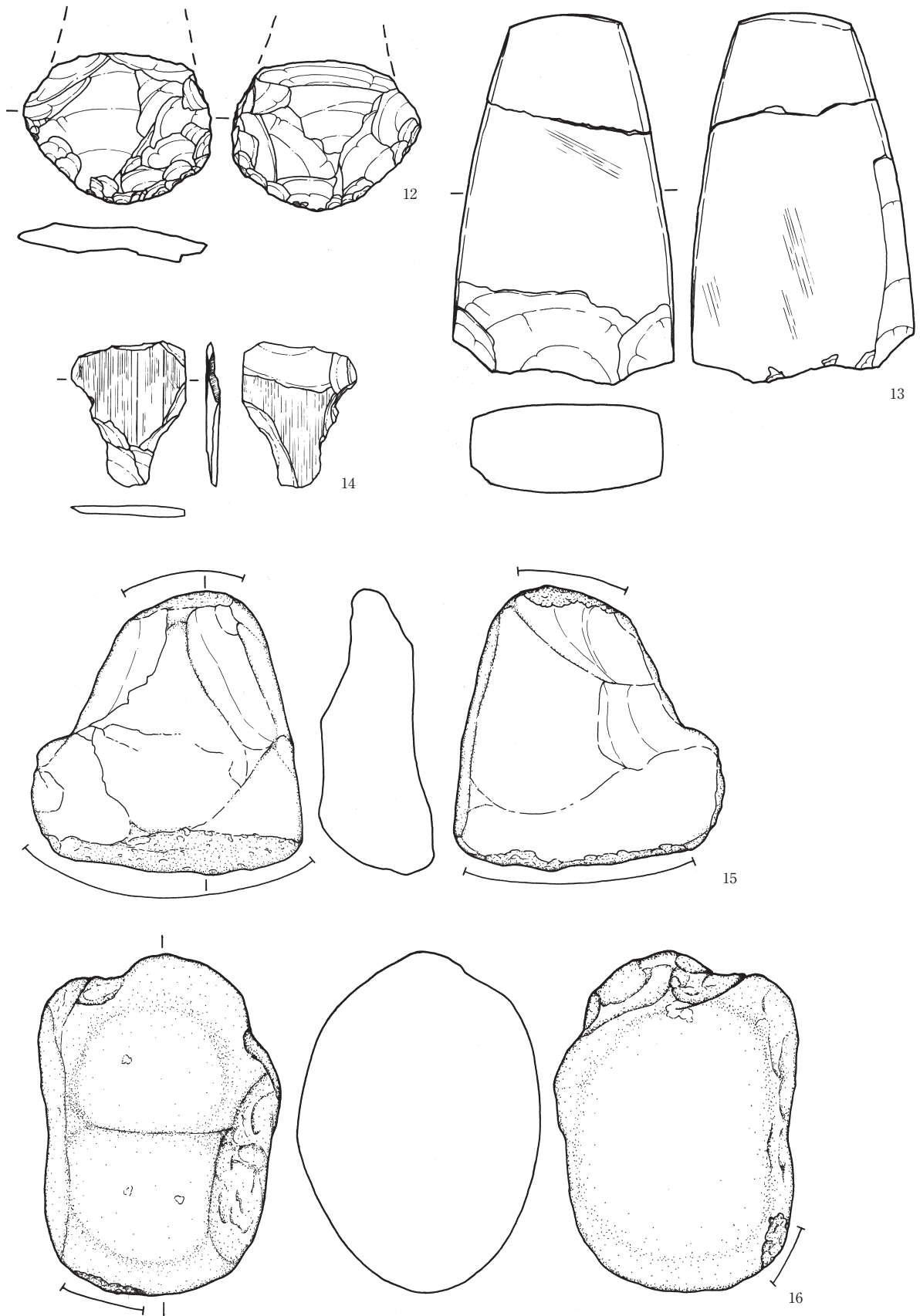


图35 石器(2)

表4 石器観察表(2)

番号	区	出土遺構	層位	器種	法量(最大値) [cm, g]				石 材	備 考
					長	幅	厚	重量		
A	2次面	16 r		剥片	1.68	3.19	0.87	3.59	鉄石英	剥離面打面, 背面自然面
A	2次面	16 r		剥片	4.10	3.87	1.94	22.16	鉄石英	背面自然面あり1/2, 剥離面打面
A	2次面	16 r		剥片	7.10	4.66	1.07	30.64	無斑晶質安山岩	自然面打面, 背面自然面あり1/2, 円磨度5
A	2次面	56 r		剥片	3.00	2.05	0.76	2.19	黒曜石	点打面, スポール状, 冷山
A	2次面	68 r		剥片	3.50	2.50	1.11	8.63	無斑晶質安山岩	剥離面打面, 背面自然面, 円磨度6
A	検出面	Tr		剥片	4.82	6.88	1.27	42.29	玄武岩?	
A	検出面			剥片	4.28	1.85	1.57	10.55	チャート	自然面打面, 円磨度6
A	検出面			剥片	3.20	1.17	1.05	3.96	鉄石英	剥離面打面, 打面調整薄片か?
A	検出面			剥片	2.20	2.76	0.65	3.57	無斑晶質安山岩	剥離面打面
A	検出面			剥片	4.26	4.06	1.11	19.92	安山岩	剥離面打面
A	検出面	(SP25)		剥片	3.65	2.27	0.47	3.47	黒色安山岩	線打面, 剥片端部に連続する微細な剥離痕
B	SB 1		3	剥片	2.12	2.58	0.69	2.88	チャート	剥離面打面, 下辺裏面に連続する微細剥離痕
B	SB 1		3	剥片	3.01	3.08	1.10	9.83	チャート	背面自然面あり1/2, 円磨度5
B	SB 1		2	剥片	1.28	3.00	0.40	1.18	無斑晶質安山岩	
B	SB 1		2	剥片	1.46	3.34	0.55	2.28	無斑晶質安山岩	剥離面打面,
B	SB 1		2	剥片	2.00	4.80	0.57	6.09	無斑晶質安山岩	自然面打面, 円磨度6
B	SB 1		1	剥片	3.14	2.95	0.80	7.24	無斑晶質安山岩	自然面打面
B	SB 1		2	剥片	3.41	2.58	1.13	9.92	黒色安山岩	点打面
B	SB 1		1	剥片	5.16	4.14	1.94	29.14	頁岩	自然面打面
B	SB 1		1	剥片	2.24	3.30	0.64	4.15	頁岩	剥離面打面
B	SB 2		1	剥片	2.14	3.31	0.59	3.61	チャート	自然面打面, 円磨度5
B	SB 2		1	剥片	3.40	3.65	0.71	9.86	無斑晶質安山岩	自然面打面, 円磨度6
B	SB 3		2	剥片	3.36	3.34	0.96	7.75	安山岩	
B	SB 3		1	剥片	1.03	3.08	0.44	1.86	珪質頁岩	
B	SB 3		1	剥片	3.52	3.58	0.75	8.98	頁岩	剥離面打面, 左辺表裏面に連続する微細剥離痕
B	SB 4		2	剥片	1.93	3.55	0.82	5.94	無斑晶質安山岩	自然面打面, 円磨度6
B	SB 4		1	剥片	3.49	3.73	0.67	8.96	頁岩	
B	SB 5		2	剥片	3.16	2.18	1.05	4.69	チャート	剥離面打面
B	SB 5		1	剥片	3.35	1.57	0.52	2.80	粘板岩	
B	SB 5		1	剥片	3.46	4.83	1.53	15.50	安山岩	
B	SK 1			剥片	3.05	2.70	0.96	6.84	チャート	剥離面打面
B	SK 1			剥片	2.14	3.16	0.50	2.76	頁岩	剥離面打面, 自然面あり
B	SK 1			剥片	3.50	2.07	0.91	4.42	頁岩	
B	SK 1			剥片	3.00	3.27	1.09	9.76	頁岩	線打面, 背面自然面, 円磨度3
B	SK 1			剥片	2.20	2.30	0.49	1.97	頁岩	下辺裏面に連続する微細剥離痕
B	SK 3			剥片	2.92	3.00	0.60	2.39	頁岩	剥離面打面
B	検出面			剥片	3.81	3.10	1.13	6.13	頁岩	剥離面打面
B	検出面			剥片	3.30	2.04	1.05	4.08	頁岩	自然面打面

第Ⅳ章 結 語

今回の調査で検出された時期の明確な遺構は、弥生時代中期住居址1・溝址1、弥生時代後期住居址1、古墳時代後期住居址8、奈良時代住居址2、平安時代(?)墓址1であり、遺構は確認されなかったものの縄文時代後期の土器・石器も出土している。縄文時代後期以降平安時代にいたるまで、断続的に集落が形成される点、これまでの周辺の調査成果と同様の結果が得られている。

北長野通り道路改良事業、北長野駅前B-1・A-2地区市街地再開発事業等の大規模な公共事業や、民間のマンション建設事業に伴い、平成6年以降市教委では吉田地区における発掘調査を継続して実施してきた。当面予定される大規模な公共事業は、今回の北長野通り地点をもって終了するため、吉田地区におけるこれまでの調査成果から当地域における集落の変遷を概観し、結語としたい(図36)。

縄文時代は中期後半～後期の遺構が周辺から確認されている。今回の調査地点①では明確な遺構は確認できなかったものの、③地点では後期の敷石住居址や集石土壙などが、さらにJR北長野駅周辺では中期後半の埋甕が検出されており、長野電鉄線を挟んで南東方向へ、すなわち③地点から扇状地扇端方向へ向けて中期から後期の集落が展開するようであるが、それ以降の縄文期の遺構・遺物は確認されていない。

この地域に再び集落が形成されるのは弥生時代中期後半になってからである。②・③地点では栗林式期後半の円形住居址が環状に集中して検出されており集落の中心部分の様相を呈している。④地点ならびに、図示してないがJR北長野駅周辺でも当該期の住居が散在的に検出されており、少なくとも南北300mほどの集落規模が想定される。ただし環濠の可能性のある溝址等は未確認である。

続く弥生後期前半の吉田式期は遺構数が激減する。中期集落の中心部である②・③地点ではまったく遺構が確認できず、周辺部である①・④地区で3軒の住居址が確認されているに過ぎない。この様相は弥生後期後半の箱清水式期にも継続する。遺構数は後期前半よりも増加するものの住居の立地は吉田式期同様周辺部に散在傾向を示す。さらに古墳時代前期は集落を南東方向に移動させるようで、この地域からは当該期の遺構は確認されていない。

古墳時代後期になると再び大規模な集落が出現する。②・③地区に主軸を北西方向に向けた住居が集中して検出されているが、この時期の住居は①～⑤地区全体に満遍なく存在する状況が見て取れ、集落規模は少なくとも径300mほどを呈する。当然すべての住居が同時存在したわけではないが、浅川扇状地における古墳時代後期の集落としてはかなり大規模な集落といえよう。

続く奈良時代は住居数は減少し、住居が散在するが、平安時代に入ると④地区に住居が集中する傾向が伺われる。さらに弥生時代後期同様、平安期の住居址は古墳後期の集落の中心②・③地点では確認されていない。時期による集落立地の変遷にはさまざまな要因を加味する必要があるが、浅川の旧流路の問題も絡め今後検討が必要であろう。

中世の遺構として明確なものは③地点で溝址が1本確認されているに過ぎない。幅約4m、深さ1.1mの断面V字形をなす中世後半の溝址で、ほぼ南北方向に直線的に伸びる形態で検出されている。真宗寺院でありながら単郭居館跡同様の屋敷構えであった可能性が指摘されている善教寺との関連も考えられるかもしれない。

以上、これまでの調査成果をもとに当地域における集落の変遷を概観してきた。面積的にはほんの数パーセントを調査したに過ぎないわけであるが、予想外の大規模な集落遺跡が当地域の地下に眠っていることが明らかになりつつある。今後の調査成果に期待し、結語としたい。

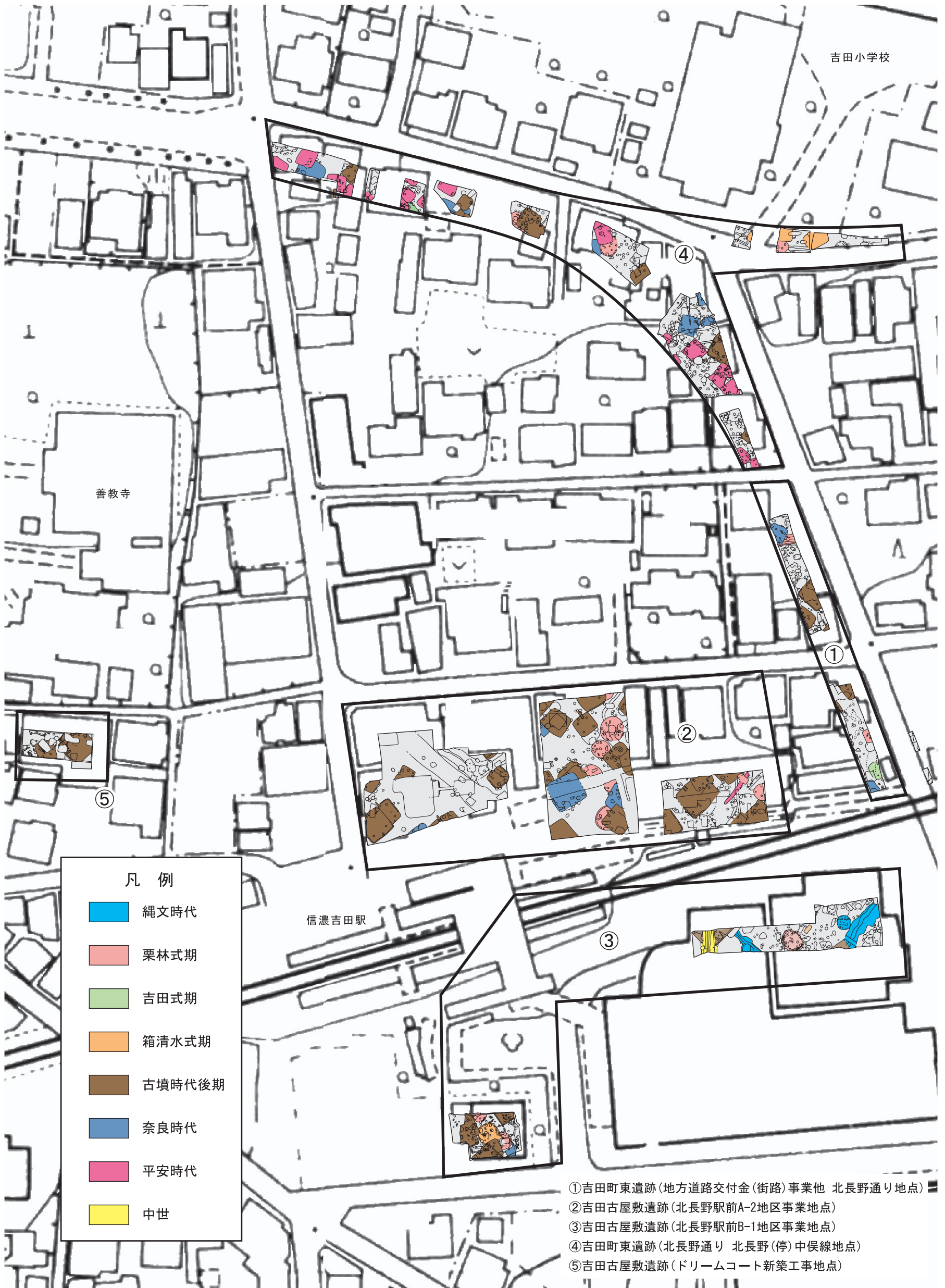


図36 調査地周辺での遺構の時期的変遷



1



2



8



5



7



12



14



17

A区 SB 1



1



3



2

A区 SB 4



1



3

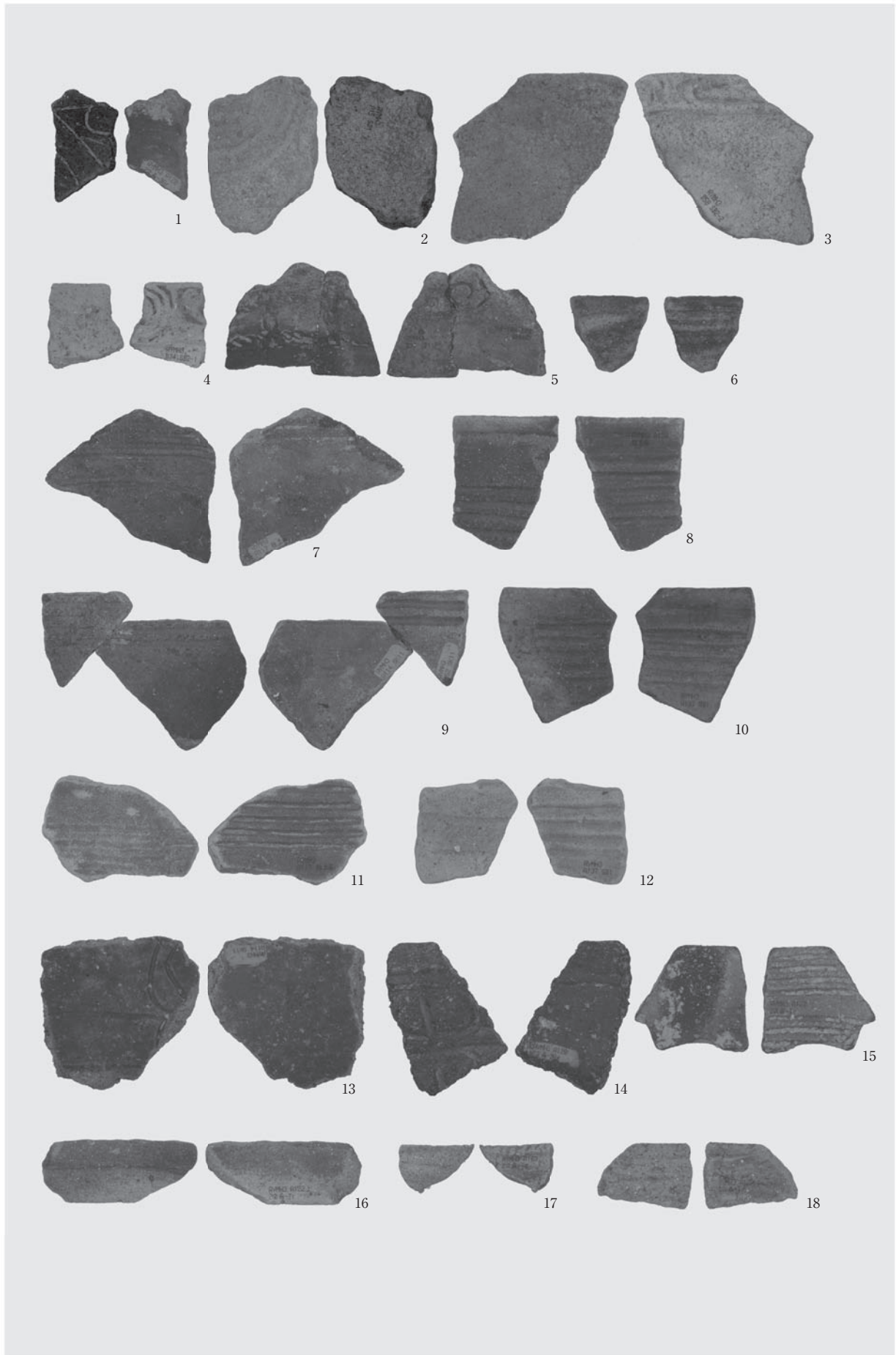
A区 SB 6



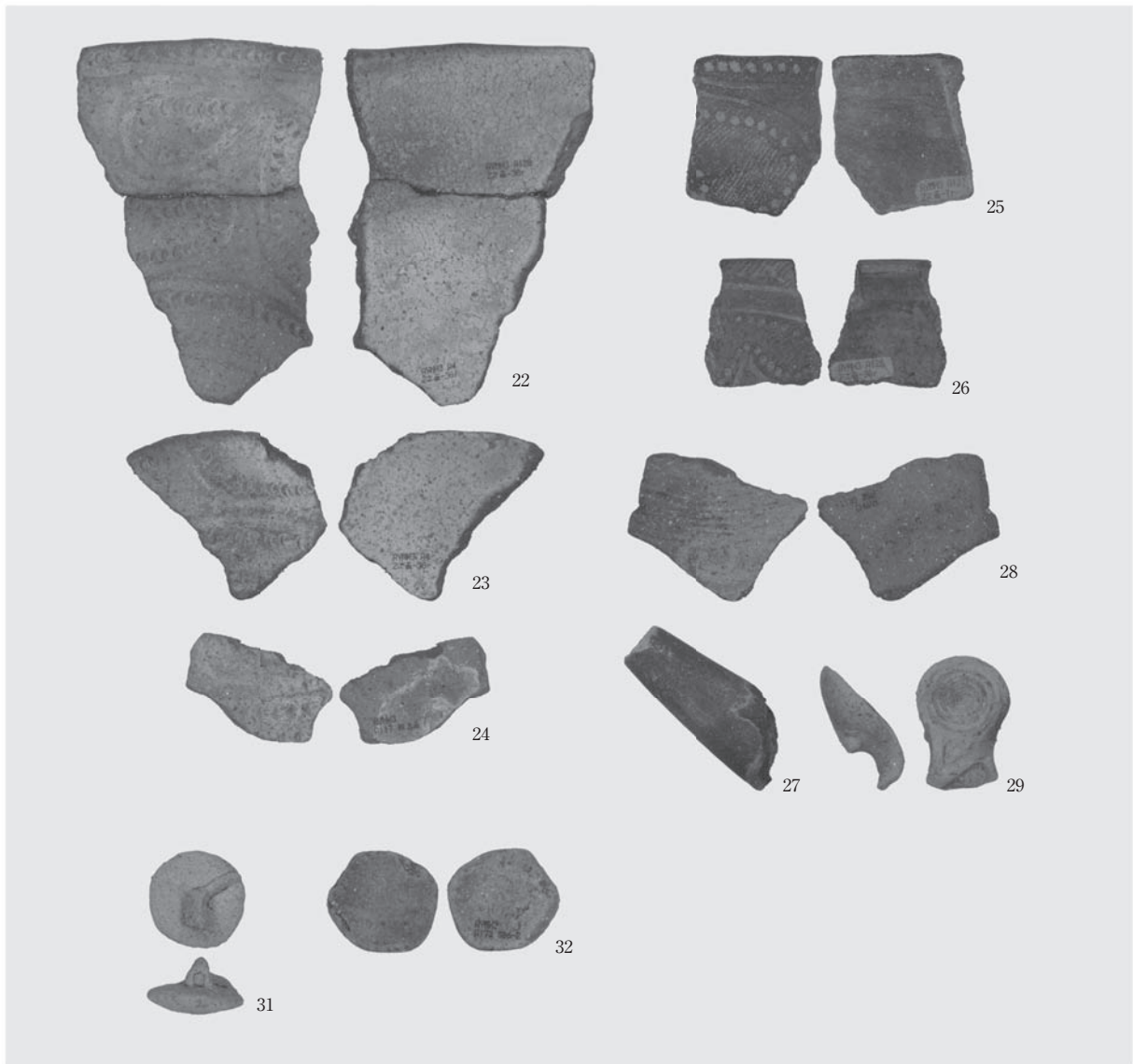
B区 SB5



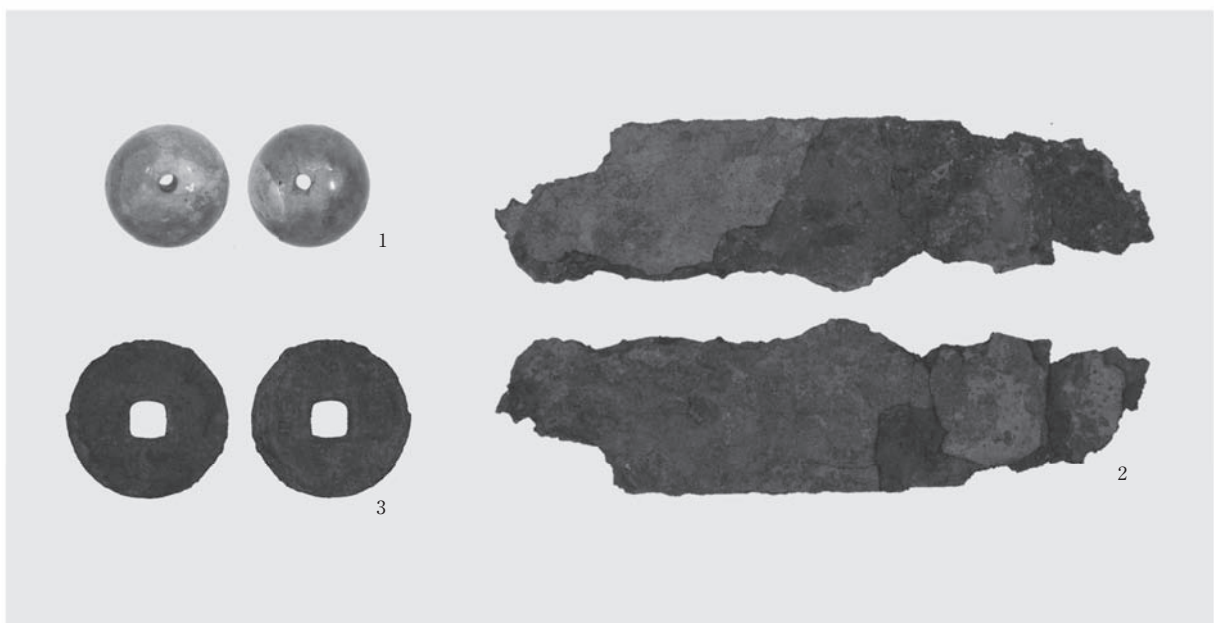
縄文時代の土器・土製品



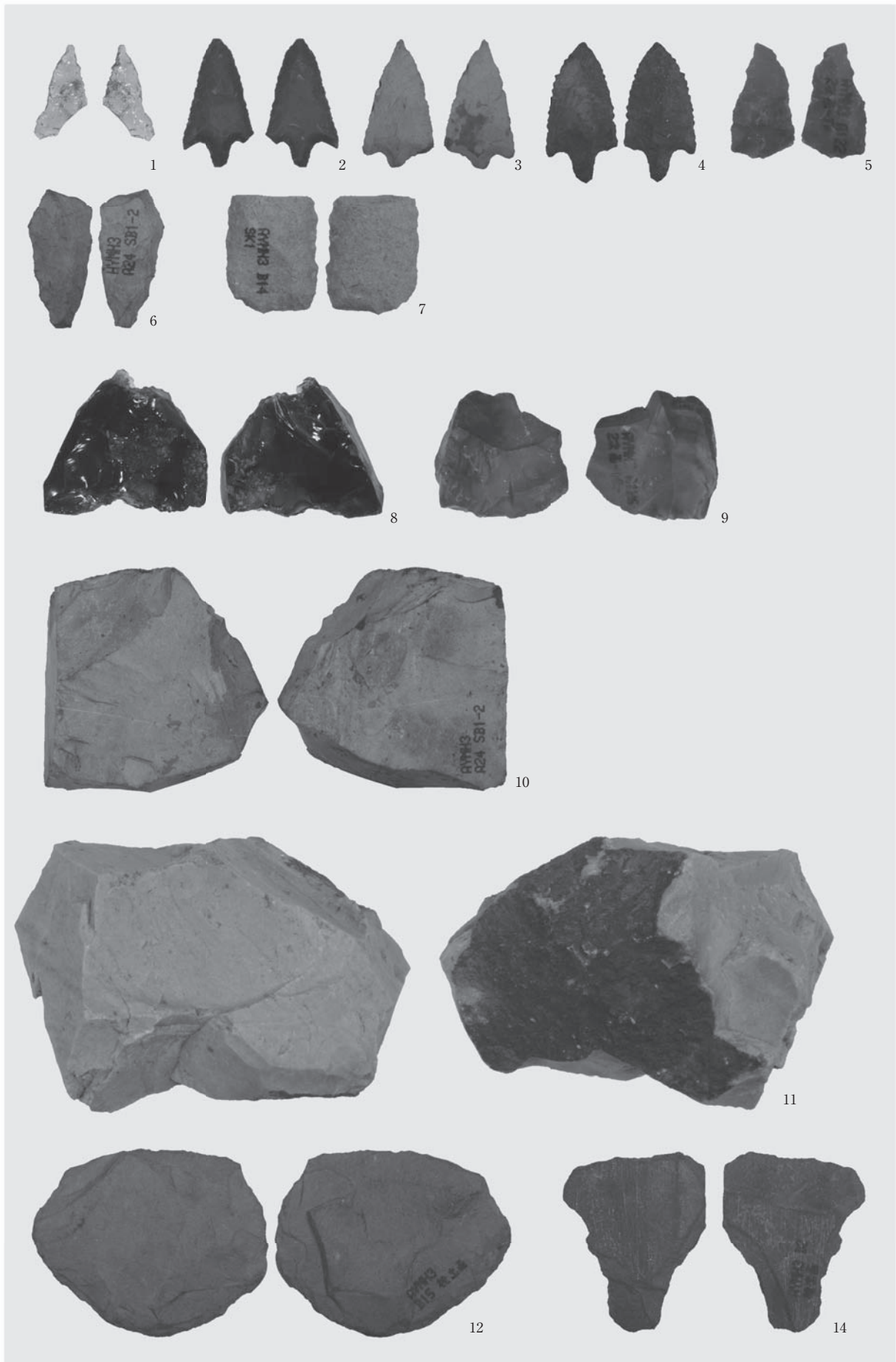
縄文時代の土器・土製品(1)



縄文時代の土器・土製品(2)



ガラス製品・鉄製品・銅銭（縮尺不同）



石器(1)



石器(2)

浅川扇状地遺跡群

駒沢新町遺跡(3)

2010年3月

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野市上駒沢における「中央地所駒沢団地造成工事」に伴う発掘調査報告書である。
- 2 調査は、中央地所(有) 代表取締役 柄澤恵輔と長野市長 鷲澤正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市大字上駒沢字新町504ほかに所在する。
- 4 発掘調査は、平成20年6月2日から6月13日にかけて行い、調査面積は300㎡である。
- 5 遺構の測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 6 本文および掲載図中には、遺構の略号を用いた。以下の通りである。
SB：竪穴住居址、SD：溝跡、SK：土坑
- 7 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略記号「AKSⅢ」を用いて注記を行い、遺構図版類と共に長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

例言・目次

第Ⅰ章 調査の経過	52
第1節 調査に至る経過	52
第2節 調査体制	52
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	53
第Ⅲ章 調査の成果	53
第1節 調査の概要	53
第2節 遺構と遺物	56
第3節 まとめ	57

挿図目次

- 図1 調査地位置図（1：20,000）
- 図2 調査地周辺の遺跡
- 図3 調査区全測図（1：200）
- 図4 1号住居址実測図・出土土器実測図
- 図5 1号土坑実測図・出土土器実測図

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

平成19年3月14日付で中央地所(有)より中央地所駒沢団地造成工事に伴う「開発行為計画協議書」が提出され、当該開発行為区域が埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡」に該当しており、遺跡の保護を図るため試掘調査が必要の旨を回答する。その後、中央地所(有)と長野市埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財の保護協議を重ね、平成20年度に記録保存を目的とした発掘調査を実施することが計画された。平成20年4月9日付で中央地所(有)より文化財保護法第93条に基づく開発行為の届出がなされ、4月23日付で長野県教育委員会より発掘調査を必要とする通知がなされた(20教文第7-42)。その後、5月30日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。発掘調査は平成20年6月2日～13日のうち実質9日間にわたって実施し、調査面積は300㎡である。

平成21年度に、整理作業を実施し、本報告書の刊行に至っている。

第 2 節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 陸秀 (～H 21.12)	堀内 征治 (H 21.12～)
総括管理者	文化財課長	雨宮 一雄 (～H 20)	金井 隆子 (H 21～)
総括責任者	埋蔵文化財センター所長	青木 和明	
	(庶務担当) 係長	宮沢 和雄 (～H 20)	北村 嘉孝 (H 21～)
	職員	吉村 久江 (～H 20)	大竹 千春 (H 21～)
	(調査担当) 係長	千野 浩 (H 21～)	
	主査	小林 和子	
	主事	宿野 隆史 (～H 20)	
	主事	塚原 秀之	
	専門員	遠藤恵実子・山野井智子・柴田 洋孝 (～H 20)	
		向山 純子 (～H 20)・小林 由実・小山 夏奈・西澤 尚紘	
		山本 賢治 (H 21～)	
発掘作業員	上原律江・金子多恵子・後藤一雄・塩入洋子・田村秀之・寺島直利・宮澤周子・山口勝己 和田五男・倉島邦子		
整理調査員	青木善子・池田寛子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子		
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子		
遺構測量	株式会社写真測図研究所		

長野市教育委員会埋蔵文化財センター担当による発掘調査の遂行においては、多くの方々のご支援をいただいている。発掘調査事業の委託者である中央地所有限会社におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力により、円滑に調査事業を実施できるようご配慮を賜った。深甚なる謝意を表するものである。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

飯縄山を水源とする浅川は、北側に並流する駒沢川と複合しながら長野盆地の西縁を東南方向に流下し、浅川扇状地を形成している。調査地が所在する上駒沢地区はこの扇状地の末端部分にあたり、千曲川氾濫原との境界において駒沢川が浅川に合流する地点に接している。扇端部の湧水地帯にあることから、低湿な水田地帯が形成されている中で、駒沢川と新田川（駒沢川の旧流路）に挟まれた、中洲地帯が微高地を呈し、旧来からの集落が営まれており、調査地点はこの微高地上に位置している。

扇状地の末端に位置する上駒沢地区は、かつて浅川や駒沢川による氾濫を幾度も被ってきたことが影響してか、遺跡の所在確認や微地形の把握が困難な地帯といえる。当遺跡以外の埋蔵文化財包蔵地としては「駒沢新町遺跡（駒沢祭祀遺跡）」「上長畑遺跡」「駒沢城跡」が知られているが、当遺跡も含めてその実態は判然としない部分が多く、埋没地形を含めての遺跡立地の検討が今後の課題となっている。

- 〔参考文献〕 長野市教育委員会 1984 「石川条里的遺構・上駒沢遺跡」
1996 「浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡 小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ」
2005 「石川条里遺跡(11)・本村東沖遺跡(3)・上長畑遺跡」
長野市 2003 『長野市誌 第12巻資料編 原始・古代・中世』
長野県教育委員会 1998 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その2」

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査地の北西にはJR信越本線を挟んで著名な駒沢祭祀遺跡が存在する。古墳時代中期以降の祭祀遺構が検出されており、多量の祭祀遺物や土器が出土している。今回の調査でも当初、祭祀関連遺構の存在が期待されたが、検出された遺構は、平安時代末から中世の住居址1軒、井戸址1基、溝址12条、土坑3基、柱穴等が検出された



図1 調査地位置図（1：20,000）



1. 調査地 2. 駒沢祭祀遺跡 3. 駒沢新町遺跡（長野電鉄上駒沢住宅地地点） 4. 上長畑遺跡
 5. 駒沢城跡（西友支店地点） 6. 駒沢城跡（北陸新幹線地点）

図2 調査地周辺の遺跡

のみである。出土遺物の量も少なく、遺構検出面は全体に南東方向へ傾斜していく状況が確認されており、微高地から低湿地への地形変換点付近に、今回の調査地は位置しているものと想定される。調査区北端にて住居址が1軒検出されているが、南側は井戸址1基と数条の溝址が確認されているのみで、集落遺跡の末端付近が今回の調査では検出されたものといえよう。

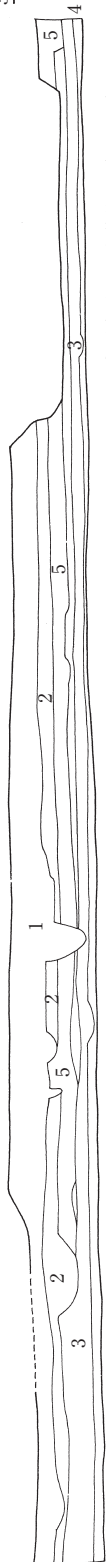


調査区全景（北側より）



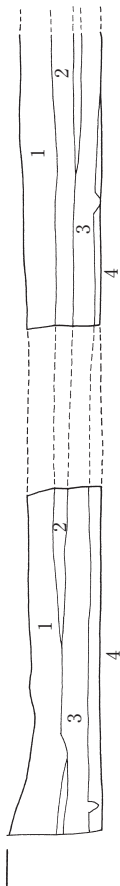
（西側より）

348.00m



調査区南壁土層堆積状況 (S=1/50)

348.00m



調査区西壁土層堆積状況 (S=1/50)

- 1.表土
- 2.黄褐色砂質土
- 3.黒褐色砂質土
- 4.黄褐色シルト
- 5.暗褐色砂質土

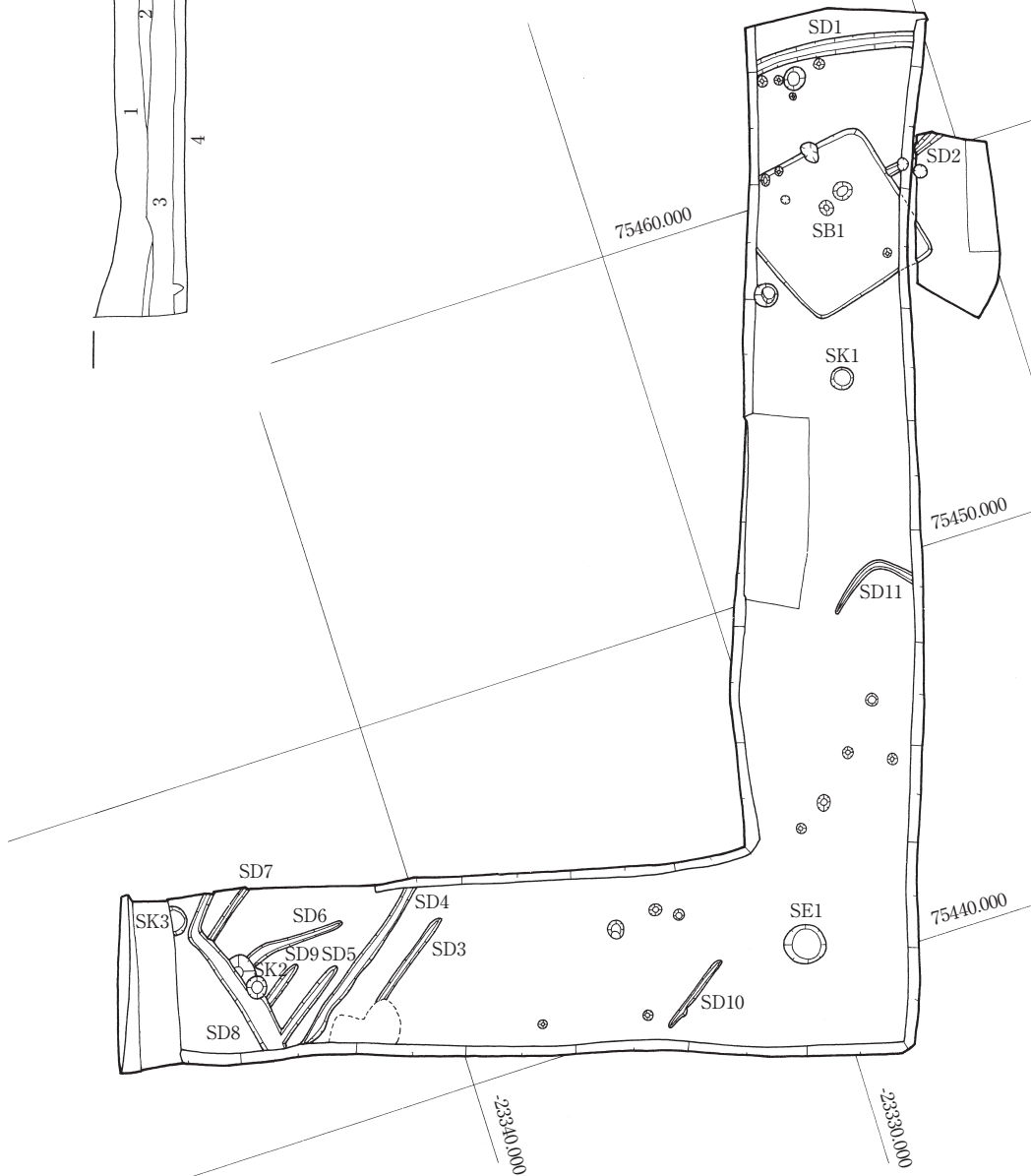


図3 調査区全測図 (1:200)

第2節 遺構と遺物

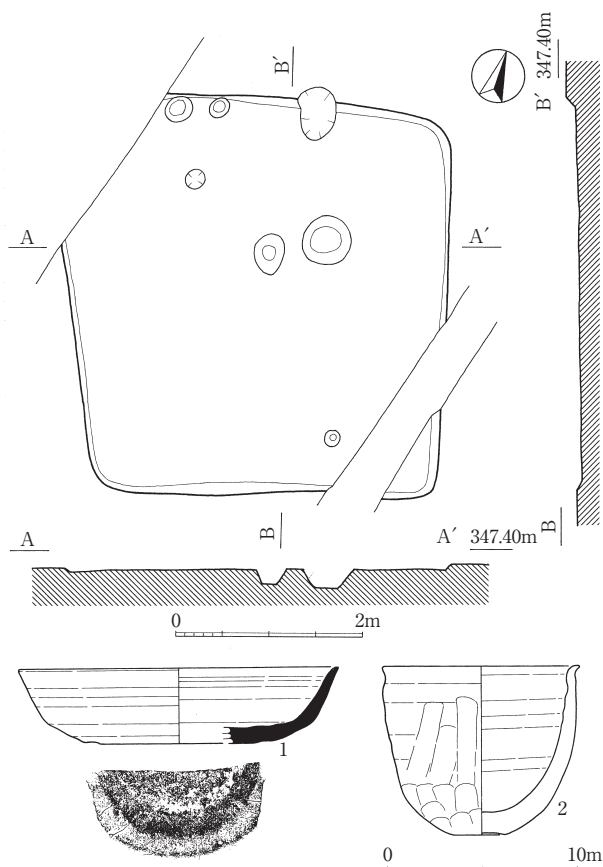
1号住居址（第4図）

調査区北端で検出された住居址で、北東隅は調査区外となる。4.10×4.20 mほどの隅丸方形を呈する。

確認面からの掘り込みは平均10 cmほどと浅く、床面も全体に軟弱で不明瞭なものである。小規模な柱穴が6本住居址内より検出されているが、本住居に伴うものかは不明である。カマド等その他の施設は確認されていない。

須恵器杯(1)と土師器碗(2)が出土している。須恵器杯は杯部下位で明確に屈曲をなして口縁部が立ち上がる形態を呈し、底部は篋切り後回転ナデで仕上げられる。土師器碗は口縁部に最大径を有し、以下内湾気味に底部に収約する。外面胴部ならびに底部付近は篋ケズリによって仕上げられ、内面はハケ後横ナデされる

出土土器の様相より、奈良時代末期の住居と考えられる。

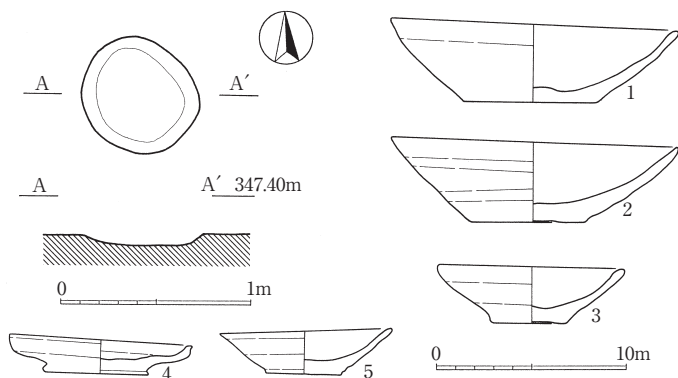


第4図 1号住居址実測図・出土土器実測図

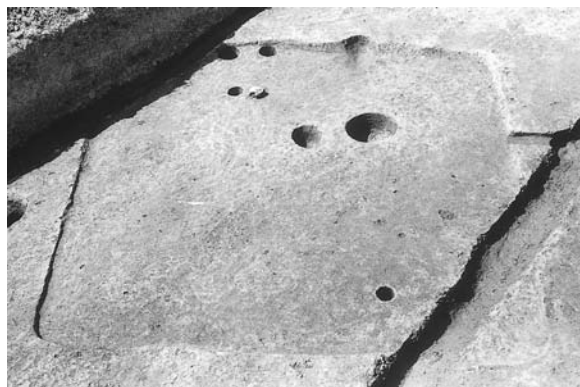
1号土坑（第5図）

1号住居址の南側で検出されたもので、径60 cmほどのやや不整な円形を呈する。検出面からの掘り込みは8 cmほどと浅い。坑底よりやや浮いた状態で土師器杯・カワラケが5点出土している。何らかの祭祀関連の遺構であろうか。

土師器杯(1・2)とカワラケ(3~5)が出土している。平安時代末期～中世の所産であろう。



第5図 1号土坑実測図・出土土器実測図



1号住居址



1号土坑

1号井戸址（第3図）

径1.0 mの平面円形を呈する井戸址である。掘削は途中で止めたために詳細は不明な部分が多いが、明確な出土遺物は無く、周辺の状況より中世の井戸の可能性が考えられる。

溝址（第3図）

調査区内より11条の溝址を検出している。いずれも幅20～40 cm、深さ10 cm前後の小規模な溝址であるが、調査区北部で検出された北部溝群（SD 1・2）と南部で検出された南部溝群（SD 3～10）に大別できる。北部溝群はともに東西方向に伸びる形態で検出されている。南部溝群は調査区南西端に集中して検出されている。SD 8は南北方向に伸びるが、その他のSD 3～7・9はSD 8に直交するように概ね東西方向に主軸を取っている。明確な出土遺物も無く、詳細は不明である。調査区中央付近に検出されたほぼ直角に曲がる形態のSD 11、さらに南端で検出されたSD 10は、その間に直線的に並ぶ柱穴列も存在することから、あるいは何らかの区画施設として把握することが可能かも知れない。時期は不明であるが、中世以降の所産であろう。



南部溝群

第3節 まとめ

今回の調査では、約300㎡の調査面積の中で、奈良時代末期の住居址1軒、平安時代末期～中世の土坑1基、中世以降と想定される溝址や柱穴群を検出した。駒沢川と新田川に挟まれた中州状の微高地上に展開した古代～中世集落の末端付近が、今回の調査で検出されたものと想定している。駒沢新町遺跡と駒沢城跡といった大規模な遺跡には含まれた上駒沢地区の集落遺跡としては、これまで上長畑遺跡の調査を実施しているが、今回の調査地同様、微高地から低湿地へ移行する地形変換点付近に位置する集落の末端が検出されている。本調査地点は今回、駒沢新町遺跡として報告したが、将来的には現在の上駒沢集落の下に存在する集落の一部として、遺跡名を別途名づける必要があるかもしれない。上駒沢地区に展開した古代集落の様相は、まだまだその一端が姿を現したに過ぎないが、今後の調査に期待し、まとめとしたい。

No	器種	法量(cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
1号住居址									
1	杯	17.0	8.0	4.0	1/4		ロクロナデ 底部：篋切り→ナデ	ロクロナデ	
2	鉢	10.4	2.7	8.9	2/3		口縁：横ナデ 体部～底部：篋ケズリ	ハケ→ナデ	
1号土坑									
1	杯	15.1	6.0	4.3	完		ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	
2	杯	15.1	7.1	4.1	2/3		ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	
3	杯	9.8	3.8	3.0	1/2		ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	
4	杯	9.6	5.3	1.8	3/4		ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	
5	杯	9.0	4.0	2.3	完		ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	

出土土器観察表

報告書抄録

ふりがな	あざかわせんじょうちいせきぐん よしだまちひがしいせき こまざわしんまちいせき							
書名	浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡 (3) 駒沢新町遺跡 (3)							
副書名								
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	宿野隆史・塚原秀之・千野 浩							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004							
発行年月日	2010 (平成22) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだまちひがし 吉田町東 遺跡	ながのけん ながのし おおあざ 長野県長野市大字 よしださんちょうめ 吉田三丁目 933-2 他	20201	A-088	35° 40' 52"	138° 13' 30"	20081028 ～ 20090114	448 m ²	道路改良
こまざわしんまち 駒沢新町 遺跡	ながのけん ながのし おおあざ 長野県長野市大字 かみこまざわあざしんまち 上駒沢字新町 504 他	20201	A-072	36° 40' 35"	138° 14' 30"	20080602 ～ 20080613	300 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田町東 遺跡	集落	縄文 ～ 平安	弥生・古墳・奈良 時代住居址、土杭	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 など				
駒沢新町 遺跡	集落	奈良 ～ 中世	奈良時代住居址 平安時代土杭 中世溝跡等	土師器・須恵器				

長野市の埋蔵文化財第126集

浅川扇状地遺跡群

吉田町東遺跡(3)

駒沢新町遺跡(3)

平成22年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 三和印刷株式会社